大阪大学グローバル日本学教育研究拠点

Annual Report 2024

拠点長挨拶

田中敏宏
大阪大学理事・副学長

大阪大学は、人文学研究科日本学専攻をはじめ、人文・社会科学のあらゆる分野において、「日本」を対象とする研究者を全国有数の規模で擁しています。留学生教育の全国的拠点である日本語日本文化教育センターを擁している点も本学の重要な特長です。

グローバル日本学教育研究拠点は、そうした豊富なリソースを組織横断的に活用し、研究面では、「日本」を手がかりとして新たな学際的・国際的学術プラットフォームを構築することを、教育面では、あらゆる研究分野の学生に対し研究成果をわが国において社会実装しようとする際の基盤的な知見を提供することを目指しています。

2020年12月に設置された本拠点は、COVID-19パンデミックの影響を受けてきましたが、その制約の解けたいま、世界の拠点的日本研究機関を結ぶネットワークのハブとしての役割を一層強化していこうとしています。また、そのような国際的視野に立ちつつ、本学の「学際融合・社会連携を指向した双翼型大学院教育システム」（Double-Wing Academic Architecture: 通称DWAA）に基づく教育プログラムを展開することにより、学際性をそなえ社会連携を指向する新たな人材を「日本」という現場において育成しようとしています。

皆さまには、本拠点の取組にぜひご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

Director's Message

TANAKA Toshihiro
Executive Vice President, Osaka University

Across all branches of the humanities and social sciences, Osaka University is home to a particularly eminent assortment of researchers engaged in the study of "Japan", including those based at the Division of Japanese Studies at the Graduate School of Humanities. Another key feature of Osaka University is its Center for Japanese Language and Culture (CJLC), which stands at the heart of the national education of exchange students.

The Global Japanese Studies Education and Research Incubator (グローバル日本学教育研究拠点, GJS ERI) is designed to take advantage of these rich institutional resources in ways that cut across organizational boundaries. In terms of research, GJS-ERI aims to serve as a new interdisciplinary and international platform for the study of "Japan", and in terms of education, the Incubator strives to provide students from all fields with the knowledge necessary for the practical application of research results for the good of society.

GJS-ERI was founded in December 2020 amid the challenges raised by the COVID-19 pandemic. Now that the restrictions put in place due to the pandemic have been eased, the Incubator has redoubled its efforts to serve as a networking hub among institutions involved in research on Japan. At the same time, by continuing to develop and expand educational programs that incorporate both the Incubator's international outlook and Osaka University's Double-Wing Academic Architecture (DWAA) system, GJS-ERI is employing its unique setting in Japan to train new global talent with both interdisciplinary capabilities and an enduring interest in social engagement.

We warmly invite you to participate in our events and initiatives.

目　次

1　拠点長挨拶
田中敏宏（大阪大学理事・副学長）

4　GJS-ERIとは
5　What Is GJS-ERI?
6　GJS-ERIの国際連携

拠点形成プロジェクト

2021年度採択 拠点形成プロジェクト
8　京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学研究
10　An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature
14　社学連携型・高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」の開発

2022年度採択 拠点形成プロジェクト
16　東アジア世界における「モノ的情報」研究拠点の形成：総合知による文化財分析の可能性
18　21世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築
20　オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究

2023年度採択 拠点形成プロジェクト
22　人文科学分野向け研究データ管理を促進するデジタル・ヒューマニティーズ学習教材開発

2024年度採択 拠点形成プロジェクト
24　明治期における伝統日本法紹介の試み――日独法学者による『令義解』独訳計画
26　キリシタン新出資料の多角的分析：トゥールーズ断簡を中心に
28　三木学の国際拠点形成――哲学的人間学の可能性、人類学と協同主義の交錯と広がり

30　コラム　日本の「日本」とアメリカの「日本」
成田龍一（日本女子大学名誉教授）

教育プログラム
32　大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」
34　大学院等高度副プログラム「デジタルヒューマニティーズ」
36　人文社会科学系オナー大学院プログラム「グローバル日本学ユニット」

38　**国際シンポジウム**
SHARED AUTHORITY 歴史を描くのは誰か［開催報告］
39　プログラム
40　開催報告
安岡健一（大阪大学大学院人文学研究科准教授）
41　From “A Shared Authority” to “A Shared AI-thority”:
A Paradigm Shift for Oral and Public History?
Michael H. FRISCH (Professor Emeritus, University at Buffalo)

ご講演をいただいた先生方より
42　福島幸宏（慶應義塾大学准教授）
43　牧田義也（一橋大学大学院社会学研究科専任講師）

44　コラム　*Passing*, *Posing*, *Persuasion*: Post-Publication Reflections
Christina YI (Associate Professor, University of British Columbia)
Andre HAAG (Associate Professor, University of Hawai‘i at Mānoa)
Catherine RYU (Associate Professor, Michigan State University)

47　コラム　Personal Experience as Method in Japanese Studies
Matías CHIAPPE IPPOLITO (Professor, El Colegio de México, Center for Asian and African Studies)

50　**月例ワークショップ**
55　講演を終えて
Amin GHADIMI（人文学研究科言語文化学専攻准教授）

56　**Graduate Conference**
第6回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies

58　今年の活動を振り返って
60　年間活動記録
61　構成員一覧
62　編集後記

GJS-ERIとは

グローバル日本学教育研究拠点（Global Japanese Studies Education and Research Incubator、略称GJS-ERI）は、人文・社会科学系の各部局でなされているディシプリン・ベースの取組の成果を踏まえつつ、教育研究の両面で次のような新たな展開を牽引していくことを目的として、2020年12月1日に設置されました。

まず、研究面では、「日本」を手がかりとして人文・社会科学の最先端の学問的対話が交わされる新たな学際的・国際的学術プラットフォームを構築することを目指しています。そのような新たな学術プラットフォームとして「グローバル日本学」を構築し、「日本」からグローバル・アカデミアに向けた研究発信力の強化を達成することが、本拠点の研究面での目的です。

つぎに、教育面では、そのような研究成果を学際的・社学連携的な教育プログラムとして展開することを目指しています。日本の文化や社会についての幅広い知識は、理系を含むあらゆる分野の学生にとって、研究成果を社会実装しようとする際の基礎的素養として役立ちます。研究成果を社会実装するための基礎学として「日本学」を位置づける立場から、学際的・社学連携的な教育プログラムを展開し、「日本」発の独創性をそなえたグローバル人材を育成することが、本拠点の教育面での目的です。

さらに、以上のような新生面を拓くための基盤として、本学で積極的に取り組まれている大量のデータに基礎づけられたデータ駆動型の教育研究に、人文・社会科学系の領域において「日本」研究の立場から注力しようとしています。

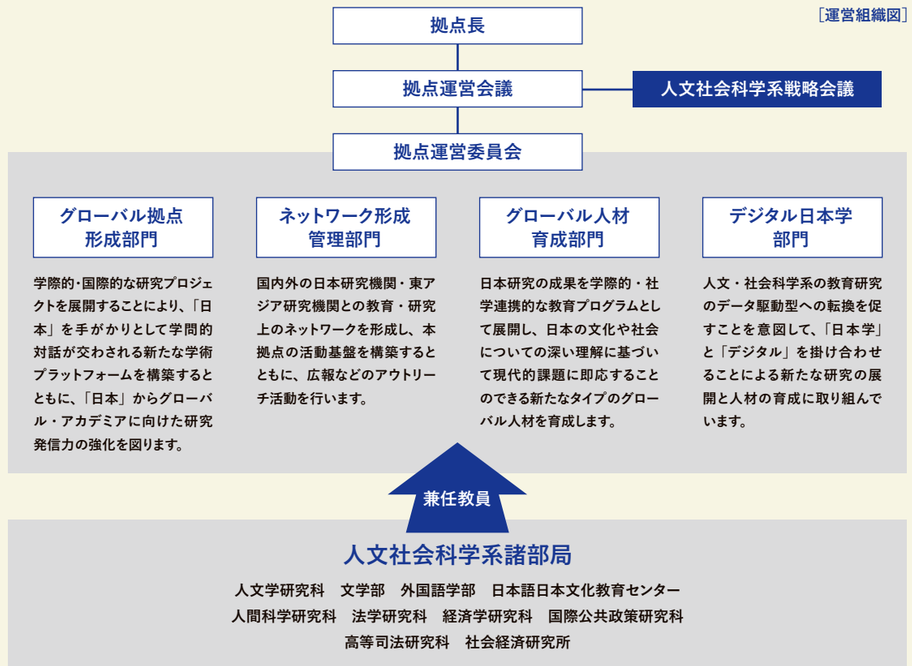
What Is GJS-ERI?

The Global Japanese Studies Education and Research Incubator (GJS-ERI), established at Osaka University on December 1, 2020, aims to generate new advances in research and education on Japan by integrating the benefits of work done in both the humanities and social science disciplines, actively adopting data-driven approaches to make the most of the rich assortment of materials accessible at the university.

In terms of research, GJS-ERI serves as an international and interdisciplinary platform for the exchange of advanced academic dialogue relating to the study of Japan. The research efforts of the Incubator are geared towards creating an environment conducive to the development of Global Japanese Studies and to the effective dissemination of research results from Japan to the global academic community.

Further, GJS-ERI endeavors to translate its research results into valuable interdisciplinary and society-oriented educational programs. For students in all fields, including the natural sciences, a broad understanding of culture and society is useful when considering the practical applications of research results. Therefore, the Incubator aims to create educational programs that incorporate the study of Japan as part of an essential foundation for the training of global talent.

［運営組織図］



GJS-ERIの国際連携

概要

大阪大学は、人文学研究科日本学専攻、日本語日本文化教育センターをはじめ、各部局に、全国有数の規模で、日本に関係する教育・研究を行っている研究者を擁しています。この人的リソースを部局横断的に組織化し、より高度な教育・研究を学際的・国際的・社学連携的に展開することにより、日本に関係する教育・研究の拠点化を図ることが、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点の目的です。なかでも、国際的な教育研究ネットワークの構築と拠点形成が本拠点の重要な役割です。そのような新たな学術プラットフォームとして「グローバル日本学」を構築し、「日本」からグローバル・アカデミアに向けた研究発信力の強化を達成することを目指して、国際連携の強化に取り組んでいます。

世界における日本研究と本拠点の位置づけ

当然のことながら、日本研究は、日本においてのみ行われているわけではありません。世界には、日本研究、あるいは日本研究を含むアジア研究を主題とする国際的な学会が、地域ごとに存在しています。日本研究の博士後期課程を擁する拠点的な教育研究機関は、北米・（英国を含む）西欧・オーストラリア・東アジアに多数ありあす。北米・（英国を含む）西欧での日本研究の国際的対話は英語を基本としており、東アジアでの日本研究の国際的対話は日本語ベースで行われることが一般的です。

本拠点がグローバルな教育研究拠点としての使命を達成するため、このような国際的学術環境のなかで緊密なネットワークを構築し、そのハブとなりプレゼンスを発揮することが求められています。本拠点ではこれまで、北米とヨーロッパにおける国際的な教育や研究の主要な拠点となっている大学の部局や研究センターと学術交流協定を締結してきました。

協定校

①ブリティッシュ・コロンビア大学
　人文学部東アジア研究学科
④ハイデルベルク大学東アジア研究センター
⑤ライデン大学人文学部

協力校

②ハワイ大学マノア校日本研究センター
③メキシコ大学院大学アジア・アフリカ研究センター
⑥東アジア日本研究者協議会関係校
⑦ハノイ大学日本語学部
⑧メルボルン大学アジア研究所

国際的ネットワーク構築に向けた今年の取り組み

本拠点では、すでに述べた国際的学術環境のなかでプレゼンスを発揮するために、年1回の国際シンポジウムや月1回のワークショップの開催、国際的共同研究の公募・採択・支援、国際的研究発信力を高めるための教育プログラムの運営などの事業を行っています。左下の地図では、これらの活動を通して構築しつつある国際的ネットワークを視覚化しています。

そのようななかで、今年は東アジアや北米・ヨーロッパにおける日本研究の国際的な拠点との連携強化に努めながら、本拠点の国際ネットワークのさらなる発展に注力しました。東アジアの教育研究機関との連携においては、東アジア日本研究者協議会へのかかわりを軸に展開しました。同協議会は、東アジアを中心とした国々の日本研究者に国際的な研究発表、議論と交流の場を提供することを目的にしています。そこで今年は、6月22日に韓国・ソウル大学で開催された特別運営委員会や、11月8日から10日にかけて台湾・淡江大学で開かれた第8回国際学術大会の運営委員会に出席し、台湾、韓国、中国や日本の大学や研究機関等の参加者とともに東アジアにおける日本研究の現状と展望について議論をしながら、同地域でのネットワーク強化を図りました。北米・ヨーロッパ地域においては、2024年9月6日にブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科と部局間学術交流協定を締結し、2024年10月21日にはハイデルベルク大学哲学部東アジア学センター（日本研究所）とも部局間学術交流協定を締結しました。

さらに7月には、ブリティッシュ・コロンビア大学とハワイ大学マノア校の先生方を迎えて月例ワークショップを開催しました（詳細に関して本レポートの44–46頁、52頁を参照）。これを機会に、本拠点とブリティッシュ・コロンビア大学（締結済み）やハワイ大学との連携を進めていくための方針について相談しました。

今後の展望

北米・西欧や英国・オーストラリア・東アジア以外の地域では、修士課程までしか日本研究のプログラムがない機関も多く、それらの地域においては、日本研究はいまだ発展途上にあるといえます。本拠点は、日本研究が発展しつつある中南米の機関や研究者と積極的に連携しようとしています。そこで、12月にはメキシコ大学院大学（El Colegio de México）の先生を迎えて月例ワークショップを開催しました。その際、先生に講演をしていただき、同大学の大学院生との研究交流ワークショップを行いました（講演要旨に関しては47–49頁を参照、月例ワークショップに関しては54頁を参照）。アジア研究関連の博士課程を置いているメキシコ大学院大学をはじめ、中南米の主要な日本研究機関とのネットワーク構築は、本拠点のグローバルな展開を新たな方向へ発展させる独自性を発揮しうるものと考えています。

拠点形成プロジェクト

2021年度採択 研究拠点構築型

京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学研究

Research on the Kyoto School and Post-Kyoto School Philosophies of Science and Technology

研究期間全体における研究成果の概要

2021年の採択当時はコロナ禍の影響がいまだ強かったこともあり、本研究プロジェクトは主としてZOOMを活用したオンラインないしはハイブリッド形式での実施となりました。研究期間中、オンラインでの研究会は計6回開催され、いずれも京都学派およびポスト京都学派に関わる哲学および関連分野のテーマをとりあげました。哲学思想分野では西田幾多郎、三木清、下村寅太郎、中井正一といった京都学派を代表する哲学者の業績の詳細な検討をしたほか、関連領域では今西錦司（生態学）や岩田慶治（文化人類学）をとりあげ、京都学派の多様な展開と幅広い影響関係、そしてそれらの今日的な意義について検討しました。研究会には、プロジェクトメンバーに加えて、ゲストとして中堅若手を中心とする学外の研究者が数多く参加し、毎回20名以上の参加者がありました。オンラインを活用したハイブリッド形式の研究会の効果であり、研究活動の学外への発信という点でも、拠点形成事業という点でも、一定の成果があったと考えています。2022年度、2023年度には、研究プロジェクトの活動を総括するシンポジウムを対面・オンラインのハイブリッド形式で開催しました。特に最終年度の総括シンポジウムには70名を超える参加があり、本研究プロジェクトへの関心の高さをうかがうことができました。

海外での研究活動の成果として、2021年度、2023年度の2回、日本哲学ヨーロッパ・ネットワーク（ENOJP）が主催する国際会議に参加して研究成果の発表をしたほか、海外研究者との交流を深めることができました。

2023年9月に参加したENOJPコーク大会にて、懇親会の様子

2023年12月に開催したハイブリッド研究会の様子

活動期間中、メンバー構成に大きな変更は生じていません。他方で、活動を通じて着実に研究者ネットワークを広げることができ、2022年度と2023年度に実施したシンポジウムでは、そうしたネットワークを活かして学外からゲストをお呼びし議論を深めることで、拠点形成事業としての役割を果たすことができました。また、幅広く関係する研究者に関与いただいたことで、京都学派の学術的成果がもつ影響範囲について、当初の想定を超えて広がりをもった検討をすることができました。一例をあげれば、日本哲学と文化人類学の関わり、フランス・エピステモロジーとの関わり、日本思想の生活思想への展開といった主題が、あらたに京都学派の科学哲学・技術哲学の歴史的意義を検討するうえで重要な主題となることが明らかとなってきました。

プロジェクトは2023年度をもって終了となりますが、本プロジェクトを通じて醸成された以上の学術的関心については、引き続き取り組む意義があると考えています。そのため、本プロジェクトのコアメンバーを中心としながら学外のメンバーに加わっていただくかたちで、2024年度以降新たに研究会を立ち上げる準備を進めています。そこでは、京都学派およびポスト京都学派の科学哲学や技術哲学にかかわるこれまでの研究成果に立脚し、その哲学的実践が戦前から戦中、戦後にかけて「市民」の「生活」の思想へと展開していく系譜や、個々の思想的変遷をたどることを研究テーマとして検討しています。

近年、「共生」や「共創」を旗印に社会の幅広いアクターが連携しながらオープンに研究や実践を進める動きが広がっていますが、こうした研究動向は多くの場合、欧米のオープンイノベーション等の政策的議論に理論的な支柱を持ち、その背景には欧米における科学哲学・技術哲学の現代的な展開があります。そのためこうした議論には、日本社会における過去の歴史的実践との認識論的な断絶がみられたり、過去の取り組みや歴史的経緯が軽視されていたり、さらには実情に必ずしも適合しない目新しい理論や概念が横行するといった特徴がみられます。しかしながら、20世紀の日本においても、市民社会論、市民運動論、フィールドワーク論、生活文化論などの市民参加型の「生活」を重視する思想が広く展開していたことが知られており、そこには戦前にアカデミズムとジャーナリズムの間で活動した思想家である三木清や中井正一からの知的な影響関係をみてとることができます。この意味で、京都学派の科学哲学・技術哲学の研究成果は、今日の共生や共創のテーマに対して、日本社会に固有の歴史的コンテクストを導入する契機となりうるでしょう。

本プロジェクトでは、とりわけ最終年度後半の活動を通じて今日のアクチュアルな研究・実践上の課題へと展開する可能性が見いだされ、新たな研究プロジェクトを立ち上げるきっかけが生まれました。こうした研究の展開も、本プロジェクトの重要な成果であったと考えています。次なる共同研究では、京都学派にとどまらず、戦後の「思想の科学」グループや吉本隆明の思想、水俣における市民運動、歴史学における安丸良夫の民衆思想史などからの影響にも幅広く目を向けていくことになります。

最終年度の実績

2023年度は国際会議でのセッションを1つ、オンラインの研究会を1つ、オンライン・対面のハイブリッドで総括シンポジウムを1つ開催しました。

国際会議パネルセッション
Reevaluating the Theory of Technology in the Kyoto School

日時：2023年9月7日［木］16:15–18:00
会場：University College Cork（UCC）West Wing 6

研究会「岩田慶治：「京都学派およびポスト京都学派」という文脈において」

日時：2023年12月9日［土］15:00–17:00
会場：オンライン（一部対面）

シンポジウム「京都学派およびポスト京都学派と科学哲学・技術哲学の現在」

日時：2024年1月28日［日］13:00–17:00
会場：大阪大学豊中キャンパス 基礎工学国際棟1階 セミナー室
（ハイブリッド開催）

主な発表論文

論文

Higaki, Tatsuya
The Davos Dabate and Japanese Philosophy, *Welt-Schema and Einbildungskraft in Tanabe and Miki*, 2023, pp. 345–362.

檜垣立哉
「大森荘蔵と西田幾多郎：現在と身体をめぐって」『現代思想』49（15）、2021、pp. 115–126.

犬塚 悠
「ジョン・C・マラルド氏の和辻解釈をめぐって」
European Journal of Japanese Philosophy（7）、2022、pp. 97–104.

森野雄介
「猫と歴史的世界 あるいはストレンジャーのポイエシス：アンリ・マルディネから西田幾多郎を読み直す」『金沢学院大学紀要』20、2022、pp. 238–257.

織田和明
「平行線と脱走：九鬼周造と中井正一の隔たりについての思想」『社藝堂』10、2023、pp. 183–199.

山崎吾郎
「自分自身の哲学者になること：文化人類学と哲学が交錯する場所で」、檜垣立哉・山崎吾郎編『構造と自然：哲学と人類学の交錯』勁草書房、2022、pp. 1–21.

学会発表

Higaki, Tatsuya
Shimomura Toratarō's Philosophy of Science, *European Network of Japanese Philosophy 7th Annual Conference*, 2023.9.7.

Inutsuka, Yū
Creation and Responsibility in Miki Kiyoshi's Philosophy, *European Network of Japanese Philosophy 7th Annual Conference*, 2023.9.8.

Oda, Kazuaki
"Iki" of Two—Kuki Shūzō and Nakai Masakazu, *European Network of Japanese Philosophy 6th Annual Conference*, 2022.2.4.
Nakai Masakazu's Philosophy of Technique: Beyond Nakai Masakazu as a Secret Committee, *European Network of Japanese Philosophy 7th Annual Conference*, 2023.9.7.

Yamazaki, Goro
The Influence of Cultural Anthropology on Miki Kiyoshi's Philosophy of Technology, *European Network of Japanese Philosophy 7th Annual Conference*, 2023.9.7.

プロジェクト代表者
山崎吾郎（大阪大学CO デザインセンター教授）

プロジェクト構成員（学内）
森田邦久（大阪大学大学院人間科学研究科教授）
織田和明（大阪大学情報科学研究科特任助教）

プロジェクト構成員（学外）
檜垣立哉（専修大学文学部教授）
DALISSIER, Michel（金沢大学国際基幹教育院任期付准教授）
犬塚 悠（名古屋工業大学大学院工学研究科准教授）
FERRARI, Felipe（四日市大学総合政策学部准教授）
森野雄介（金沢学院大学基礎教育機構講師）

拠点形成プロジェクト
2021年度採択 研究拠点構築型

在日コリアン文学の国際研究ネットワーク構築

An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature

Final year results

During the 2023 academic year, with the easing of the coronavirus pandemic, members of the Incubator-Supported Project "An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature" had significant opportunities to collaborate face to face. In July and August of 2023, overseas Project Representative Cindi Textor (University of Utah) visited Osaka as part of an official cross-appointment agreement. During her time at Osaka University, the Incubator-Supported Project was involved in international symposia held in Osaka and South Korea. First, Project Representatives Nicholas Lambrecht (Osaka University) and Cindi Textor and GJS-ERI Associate Director Unoda Shōya visited Dongguk University in Seoul to speak at the co-sponsored symposium "Intersectionality and Being Zainichi", a bilingual event held in Japanese and Korean. There Textor spoke about the writings of authors Min Jin Lee and Yū Miri, while Lambrecht responded to a presentation on the writer Ri Kaisei (Lee Hoesung).

Next Textor, project member Sakasai Akito (University of Tokyo) and several guests from Japan, South Korea, and the United States gave presentations at the major GJS-ERI international symposium "The Global Contexts of Zainichi Korean Literature", another bilingual event held in Japanese and English. This event, moderated by Unoda and Lambrecht, was attended by several domestic and overseas members of the GJS-ERI project. Textor's presentation compared the writings of wartime Zainichi Korean author Kim Saryang with those of the contemporary Japanese-resident Iranian author Shirin Nezammafi, while Sakasai spoke about Min Jin Lee's popular novel *Pachinko*. After the symposium, project member Ijichi Noriko (Osaka Metropolitan University) met with speakers from the symposium in Osaka's Korea Town and led them on a tour of the new Osaka Korea Town Museum (Osaka Korea Town Rekishi Shiryōkan).

At the close of the academic year, members of the project as well as GJS-ERI's Unoda Shōya submitted publications for inclusion in the April 2024 edition of the South Korean journal *Ilbonhak* (*Journal of Japanology*), and several project participants met in person at the Association for Asian Studies Annual Conference held in Seattle.

Summary of results over the entire research period

Over the three-year period of GJS-ERI support, this collaborative project engaged in the construction and maintenance of an international network for research on "Zainichi" ("Japanese-resident") Korean literature, an inherently transnational and translingual subject that remains understudied both inside and outside of Japan. Members of the project were affiliated with universities in Japan, the United States, Canada, Australia, South Korea, and Hong Kong, and also included an independent writer engaged in the actual practice of writing Zainichi Korean literature. The project showed success in both promoting academic output on Zainichi Korean literature and strengthening ties between Osaka University and academic institutions inside and outside Japan.

The work of the project reconfirmed the fact that an improved understanding of Zainichi Korean literature is crucial not only for achieving a balanced perspective on the scope of modern literature written in Japanese, but also because the Zainichi Korean experience highlights key topics in contemporary literary and cultural studies worldwide, including issues of diaspora, migration, identity, discrimination, and the memory of empire. Further, locating the project in Osaka yielded benefits not only because of the academic resources of Osaka University, but also because Osaka Prefecture is home to more Zainichi Korean residents than any other prefecture in Japan. Thus the project served to connect advanced researchers who were already focused on learning from the Zainichi Korean experience to the unique historical resources and rich contemporary community found in Osaka.

During the period of immobility caused by the COVID-19 pandemic, the project conducted online workshops and group meetings where members shared information about their ongoing writing and laid organizational groundwork for future collaboration. More significant online symposia were held in February 2022 ("Research and Resources on 'Multicultural' Kansai") and August 2022 ("Ongoing International Research on Zainichi Korean Literature"). These online, multilingual workshops included the participation of senior faculty, junior faculty, and graduate students. Another key achievement of the project during the COVID-19 pandemic was the ability of domestic and international researchers to share rare and out-of-print documents and records that were publicly available, but located at sites that were inaccessible to certain members of the project due to travel restrictions.

Intersectionality and Being Zainichi

The first opportunity to collaborate in person during the project period came when many members of the project attended a conference at the University of Hawaii and the annual meeting of the Association for Asian Studies in Honolulu in March 2022. This presented opportunities to make arrangements for future hybrid and in-person activities, such as a two-day event in January 2023 when the project sponsored a two-day event bringing the well-known writer On Yūjū (Wen Yūjū) to the Osaka University campus for in-depth discussions on the writing career of the Zainichi Korean writer Yi Yang-ji (Lee Yang-ji). This event was facilitated in particular through the assistance of Osaka University GJS-ERI Steering Committee member Watanabe Eri. As the keynote speaker, On Yūjū discussed the effects of Yi Yang-ji's writing on her own development as a writer and her involvement in the production of a new anthology of Yi Yang-ji's works which was released in 2022. Project members Catherine Ryu (Michigan State University) and Nobuko Yamasaki (Lehigh University) were among those who gave presentations on the second day of the workshop, and a revised version of On Yūjū's talk at Osaka University was published in the May 2023 issue of the national literary magazine *Subaru*.

The following month, project member Jonathan Glade (University of Melbourne) visited Osaka University along with several graduate students for the three-day workshop "Developing and Leading 'Global Japanese Studies' in the Asia-Pacific", making in-depth conversations about future overseas collaborations and publications possible and facilitating the admission of the University of Melbourne to the Consortium for Global Japanese Studies, an organization of which GJS-ERI is also a prominent member.

As noted above, the pace of in-person activities accelerated further during the 2023 academic year, resulting in multiple international symposia, including a hybrid symposium convened at Osaka University's Minoh Campus which had an attendance of over 100 people. Altogether, the project "An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature" served to illustrate the positive effects that the Global Japanese Studies Education and Research Incubator can have on both research production and domestic and international interdisciplinary research collaboration; these effects will continue to be felt in the years to come.

Major research presentations and publications

Many of the major research presentations and publications related to the GJS-ERI project are listed below. This list is not comprehensive; other research results on Zainichi

The Global Contexts of Zainichi Korean Literature

Korean literature were also released by project members during the three-year period, and in some cases the project played an unquantifiable role in the production of this output.

In February 2022, the workshop "Ongoing International Research on Zainichi Korean Literature" was held online as a result of the COVID-19 pandemic. At this workshop, Ijichi Noriko presented "On the Construction and Future of the Osaka Korean Research Platform" (大阪コリアン研究プラットフォーム設立の経緯と今後), Unoda Shōya presented "Historically Situating the Anti-Discrimination Student Uprisings"(「一斉糾弾闘争」の歴史的位置), and Yasuoka Kenichi (Osaka University) presented on "The Origins of 'Multicultural Coexistence'" (「多文化共生」の源流). That summer, the project hosted the online workshop "Ongoing International Research on Zainichi Korean Literature", which was run as GJS-ERI's monthly Global Japanese Studies Research Workshop for August 2022. Following an introduction and project summary by Nicholas Lambrecht, the event included English-language presentations by Jonathan Glade (University of Melbourne) and Cindi Textor. Textor's presentation was titled "Zainichi Women and Transpacific Feminisms: Yū Miri and the Politics of Global Representation", and Glade's presentation was "Yakiniku and Kimchi: Expanding the Possibilities for Ethnic Identity in Zainichi Korean Literature and Film". Following this presentation Glade published the article "The Korean Restaurant: Beyond Violence in Zainichi Korean Film" in the *Seoul Journal of Korean Studies*, and he thanked GJS-ERI for its support in his acknowledgments.

As mentioned on the previous page, the January 2023 event "Rethinking 'Zainichi' Literature: Welcoming Author On Yūjū"(「在日」文学再考：作家・温又柔さんを迎えて) included a keynote speech by On Yūjū which was later edited for publication in the literary journal *Subaru*. Other presenters and discussants included Nobuko Yamasaki, Catherine Ryu, Kang Yuni (Sōka University), Jo Gwanja (Seoul National University), Watanabe Eri, Unoda Shōya, and Nicholas Lambrecht.

The first of two international symposia held in July 2023 was "Intersectionality and Being Zainichi" (インターセクショナリティと在日性／상호교차성과　재일성) at Dongguk University. At this conference, project representative Cindi Textor gave an academic talk, and project representative Nicholas Lambrecht and project member So Hye Kim (Korea University / University of Hong Kong) acted as discussants. In addition to faculty affiliated with GJS-ERI, conference presentations were made by participants from Seoul National University, Dongguk University, Hallym University, Konkuk University, and Korea University.

The second international symposium was "The Global Contexts of Zainichi Korean Literature"(在日コリアン文学をグローバルな文脈で読みなおす), held at Osaka University. This symposium included keynote speeches by Kim Hwangi of Dongguk University ("Border-Crossing / Mixed Korean Disaporic Literature", 越境／混種のコリアン・ディアスポラ文学) and Nayoung Aimee Kwon of Duke University ("Transpacific Archives of Absence: Navigating Silenced Histories Across Japanese and American Empires"). Project representative Cindi Textor gave a research presentation titled "Muslim Migrants to Japan in Local and Global Perspective: From Kim Saryang's 'Mushi' (1941) to Shirin Nezammafi's 'Salam' (2007)", and project member Sakasai Akito gave the presentation "Adding Another Layer: On the Use of the Term 'Korean' in Min Jin Lee's *Pachinko*" (もう一層加える：ミンジン・リー『パチンコ』と「コリアン」という呼称について). Other participants included Hosomi Kazuyuki of Kyoto University, Jo Gwanja, Unoda Shōya, and Nicholas Lambrecht, and other members of the GJS-ERI project attended the symposium online.

In 2024, results of the 2023 "Intersectionality and Being Zainichi" symposium resulted in the publication of multiple papers in a special section of Volume 62 of the South Korean publication *Ilbonhak* (*Journal of Japanology*). Nicholas Lambrecht and Cindi Textor co-authored the English-language introductory article "On Intersectionality and Being Zainichi", and Textor also released the Japanese-language article "Transnational Intersectionalities and 'Zainichi' in the English-Language Gaze: On Min Jin Lee's *Pachinko* and Yū Miri's *Tokyo Ueno Station*" (英語圏から見た「在日」と国境を越えるインターセクショナリティ：ミン・ジン・リー『パチンコ』、柳美里『JR上野駅公園口』をめぐって). Other symposium participants who released articles in this edition of the journal included Shin Jaemin of Dongguk University, who contributed the Korean-language article "Lee Hoesung's Literary Considerations in the 1980s and the Transition to the 1990s: Focusing on Ethnicity, People, the Third World, and Trans-East Asian Perspectives" (1980년대 이회성의 문학적 고찰과 1990년대로의 이행: 민족, 민중, 제3세계, 트랜스 동아시아적 관점을 중심으로), and GJS-ERI Associate Director Unoda Shōya, who wrote the Japanese-language article "Identity Politics and Intersectionality in the Anti-Discrimination Student Uprisings" (「一斉糾弾闘争」のアイデンティティ・ポリティクスとインターセクショナリティ).

In addition, although not among the direct output of this project, project members including Catherine Ryu, Cindi Textor, Nobuko Yamasaki, Christina Yi (University of British Columbia), and Andre Haag (University of Hawai'i at Manoa) released the volume *Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Japan's East Asian Empire* via the University of Hawaii Press in November 2023. This volume included multiple chapters discussing cultural production related to the Zainichi Korean community in Japan. It is expected that collaboration among the project members will continue to result in additional publications in the remainder of the 2024 academic year and beyond.

Project Representatives

Nicholas LAMBRECHT
Osaka University Graduate School of Humanities, Assistant Professor

Cindi TEXTOR
University of Utah (USA), Assistant Professor

Osaka University Collaborators

YASUOKA Kenichi
Osaka University Graduate School of Humanities, Associate Professor

External Collaborators

IJICHI Noriko
Osaka Metropolitan University, Professor

TOBA Koji
Waseda University, Professor

SAKASAI Akito
University of Tokyo, Associate Professor

Felipe MOTTA
Kyoto University of Foreign Studies, Lecturer

ZHONG Zhang
Independent writer

Catherine RYU
Michigan State University (USA), Associate Professor

Christina YI
University of British Columbia (Canada), Associate Professor

Jonathan GLADE
University of Melbourne (Australia), Lecturer

So Hye KIM
Korea University (South Korea), Research Professor

Nobuko YAMASAKI
Lehigh University (USA), Associate Professor

Andre HAAG
University of Hawai'i at Mānoa (USA), Assistant Professor

拠点形成プロジェクト

2021年度採択 教育プログラム開発型

社学連携型・高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」の開発

Development of the Graduate Program for Advanced Interdisciplinary Studies in “Theory and Practice of Minority Education in Japan”

最終年度の実績

最終年度となる2023年度は、大阪大学大学院等高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践（Theory and Practice for Minority Education in Japan）」のカリキュラムに関して、2年目に開講されているフィールドワーク実践科目の整備を行いました。2023年4月の時点で、8名の学生が本プログラムを受講しており、2024年3月には、プログラムを修了しディプロマを獲得した学生を1人、輩出しました。その学生は、フィールドワーク実践で得られた地域連携ネットワークを活かし、大阪大学・人間科学研究科に修士論文「夜間中学生の学ぶよろこびに関する一考察：守口市立守口さつき学園夜間学級でのインタビュー調査に基づいて」を提出しました。

また、2024年2月4日にグローバル日本学教育研究拠点・月例ワークショップ「これからの『戦後』への教育学」を実施しました。このシンポジウムには、外国にルーツのある児童生徒への学習支援で2021年度から継続的に連携してきた黒田恭史氏（京都教育大学）をお招きしました。黒田氏は、大阪大学に在籍するウクライナからの留学生とともに、ウクライナから避難してきている子どもたちの学習を支援する活動を展開しています。その活動にまつわるお話を中心に、これまで約80年の間に日本が培ってきた平和教育の知識・技能をいかに今後の国際社会で生かし得るかについて、広島と沖縄をフィールドとして平和教育について研究している平田仁胤氏（岡山大学）と古波蔵香氏（福岡教育大学）とともに議論しました。

研究期間全体における研究成果の概要

誰一人取り残さない社会の実現をめざして国連サミット（2015）で採択された「持続可能な開発目標」（SDGs）の17の目標の一つに「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」（目標4）が掲げられています。これを受け、日本でも2016年に「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（教育機会確保法）が公布され、全国的に夜間中学校の設置・整備が進められているほか、何らかの困難や特別なニーズを抱える児童生徒への教育・支援および課題の多い学校への支援に力が注がれています。とはいえ、まだ成果は十分とは言えません。

特に近年、増加・多様化の傾向が著しい外国にルーツをもつ子どもたちへの教育・支援が焦眉の課題であることは、文部科学省の報告「外国人児童生徒等の教育の充実について」（2020）でも指摘されており、明らかです。学校教育には、そのような子どもたちに対する日本語・日本文化の教育のみならず、多言語による教育・福祉・生活情報の提供と学内外における学習・生活の支援、母語で話す機会や独自の文化的生活を営む権利の保障などが要請されています。しかしながら、この要請に十分に応え得る知識・技能・社会的ネットワークをもつ学校教員・支援員はまだ少ないのが現状です。

本プロジェクトは、こうした全国的・国際的な教育課題の解決に実働的に貢献し得る高度な専門的知識・技能をもつ学校教員・社会人の育成・輩出をめざすものです。

2021年度に準備を進め、2022年4月より、人間科学研究科・人文学研究科・日本語日本文化教育センターが共同して、前期課程大学院生を対象とする大阪大学大学院等高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践（Theory and Practice for Minority Education in Japan）」を開講しました。

この高度副プログラムは、Aコース（受講の前提として必要な知識は特になく、文系理系を問わず、さまざまな分野の学生が受講可）・Bコース（受講時までにすでに日本語教育に関する基礎的な専門知識・技能を習得している大学院生向け）に分かれています。受講生はそれぞれ自分に合ったコースを選択し、講義、演習、そしてフィールドワークにおける学習や経験を通して、以下の能力を身につけていきます。

① 教育学の基礎知識と日本におけるマイノリティ教育の現状と課題について理解している。
② 日本のマイノリティ教育の現状と課題について自分の意見をもち、論じることができる。
③ 日本語教育と母語保障に関する専門基礎の知識を獲得している。
④ ①〜③の専門的知識・技能を、フィールドで課題解決にむけて適用することができる。
⑤ マイノリティ教育／日本語教育・母語保障を主題とするアクションリサーチを実践することができる。

A/Bコースいずれにおいても、到達目標①②③を達成するための講義・演習科目〈理論研究科目群〉と、到達目標④⑤を達成するためのフィールドワーク科目〈実践応用科目群〉が設置されています。前者は、フィールドワークに出る前に必要な専門基礎の知識・技能を身につけることを、後者は、理論研究科目を通して身につけた知識・技能を実地で活用しながらフィールドワークを行うなかで、「現場で活かせる」専門的な知識・技能を習得することを目的としています。

フィールドワークは、大阪府教育庁やいくつかの自治体等と連携して、大阪府立福井高校、同西成高校、同大阪わかば高校、大阪府守口市立守口さつき学園夜間学級、大阪市旭区社会福祉協議会等で行われました。例えば、福井高校では、外国にルーツをもつ生徒の皆さんと多言語絵本紹介活動をしました。この活動は、大阪府立図書館が所蔵する外国語の絵本を、大阪府内各地の小学校に散在している外国にルーツをもつ子どもたちやその保護者、そして学校の先生方に向けて紹介するYouTube動画を制作するというものです。当初は、大阪大学の日本人学生・留学生（母語と日本語による絵本の概要作成）と同じく大阪大学の美術部の学生（YouTubeの背景となる挿絵の制作）がこの活動の中心を担っていたのですが、2022年度から、上述のように、福井高校に在籍する外国にルーツのある生徒の皆さんが、母語と日本語による絵本の概要作成に参加してくださることになりました。この概要作成の支援・協力を、上記・高度副プログラムを受講している2名の大学院生が支援・協力しました。完成した動画は、大阪府教育委員会のYouTubeで公開されています。

大阪府教育委員会のYouTubeですでに公開されている多言語絵本紹介動画

「ねずみのよめいり」（台湾・中国語）
https://www.youtube.com/watch?v=k78gCvw2OdA

「あかずきん」（フランス語）
https://www.youtube.com/watch?v=nN_oSLcho_g

「白藤江（バックダン）で軍服を洗う」（ベトナム語）
https://www.youtube.com/watch?v=eP5tuymALBY

「ガラナ」（ポルトガル語）
https://www.youtube.com/watch?v=OnExkqlaV4Y

以上のような活動を含め、この高度副プログラム全体を通して、地域の学校や図書館、教育委員会等と協働しながら、日本語の教育・学習を支援・促進するだけではなく、母語・母文化も大切にしながら外国にルーツをもつ子どもたちの成長を支援し、自尊心と熟達感（自分はやり遂げた、だから次の課題もできるはずだと思える感覚）を育成できる学校教員・社会人を輩出することをめざしました。

2022年度の受講者は5名（人間科学研究科3名、人文学研究科2名）、2023年度の受講生は3名（人間科学研究科2名、基礎工学研究科1名）でした。2024年3月には、プログラムを修了しディプロマを獲得した学生を1人、輩出しました。その学生は、フィールドワーク実践で得られた地域連携ネットワークを活かし、大阪大学・人間科学研究科に修士論文「夜間中学生の学ぶよろこびに関する一考察：守口市立守口さつき学園夜間学級でのインタビュー調査に基づいて」を提出しました。

しかしながら、本高度副プログラムの主軸を担ってくださっていた大学教員が2023年度末をもって退職されることになり、講義科目、フィールドワーク実践科目の継続が困難となりました。ですが、幸い、本プログラムは、2023年4月に設立された「大阪大学大学院人文学研究科附属・複言語・複文化共存社会研究センター」と事業内容が重複するため、センターに事業を引き継ぎ、本プログラムは2024年度以降、募集を停止することになりました。とはいえ、フィールドワーク実践科目の構築過程で培った地域連携のネットワークを活かして、夜間中学校における外国にルーツのある生徒への学習支援事業、大阪大学の留学生による国際理解教育の推進は、引き続き、大阪大学社会ソリューションイニシアティブ・基幹プロジェクトの一部として継続します。

夜間中学校で活動する阪大生

プロジェクト代表者

岡部美香（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）

榎井 縁（大阪大学大学院人間科学研究科教授）
櫻井千穂（大阪大学大学院人文学研究科准教授）
加藤 均（大阪大学日本語日本文化教育センター教授）
松岡里奈（大阪大学日本語日本文化教育センター特任講師）

協力機関・連携機関

大阪府教育庁
守口市教育委員会
大阪府立大阪わかば高等学校
守口市立守口さつき学園夜間学級
大阪府立福井高等学校
大阪府立西成高等学校

拠点形成プロジェクト

2022年度採択 研究拠点構築型

東アジア世界における「モノ的情報」研究拠点の形成：総合知による文化財分析の可能性

Designing a Comprehensive Framework for Analyzing the Materiality of East Asian Cultural Heritage Objects

プロジェクト概要

今日、東・東南アジア地域においては、伝統的なものづくりの技術が消滅しつつあるだけではなく、モノや道具の使用法や製造法に関する人びとの記憶や情報が失われつつある。そうしたなかで、過去の人類がどのような道具を使用し、どのような製品を生産してきたか、またどのように道具や製品を使用しなくなり、廃棄してきたかを知るためには、最先端の科学的な分析技術なども用いながら、「モノ」そのものや、その生産、流通、消費をとりまいているコンテクストについて、改めて考え直す必要がある。

これまで歴史学や人類学では、「モノ」やその生産、流通、消費を、局所的なコンテクストに即して解釈することが多かった。そうしたなか、コンテクストを地理的に拡張し、「モノ」の生産、流通、消費を地球規模でとらえようとするグローバルヒストリーの視点に加え、認識論的なコンテクストの外側にある「モノ」と人との存在論的な関係を問い直すことが求められるようになってきた。

このような問い直しの過程で、本プロジェクトが注目したのがイメージング分光分析である。イメージング分光分析は、視覚や触覚について、多くの人にとって識別できないレベルまで分析することのできる技術である。この分析手法を用いれば、過去に地球上で生産され、流通し、消費された貴重な文化財としての生活や生産の道具や工芸品、工業品のうちのすべてではないにしても、かなりの部分を破壊することなく、客観的な指標を用いて同定し、比較することが可能となる。

しかし、イメージング分光分析の利点はこれだけにとどまらない。人間の目に光として感じられる波長範囲は360－400nmから760－830nmとされ、多少の幅を持っている。地球上の有機体は、たとえが蝙蝠や蛇は830nmを越えた波長を感知することができ、昆虫や鳥は360nm以下の波長を感知することができる。地球上に存在する物質は人工物も含めて、多様な見え方をしており、その見え方に即して有機体は行動をしたり、反応したりしているのである。イメージング分光分析を用いて「モノ」を見ることは「モノ」そのものや、その生産、流通、消費をとりまいているコンテクストを、人にとって意味あるコンテクストから、他の有機体にとって意味あるコンテクストに開放することを意味している。

このことは、具体的な分析史料やサンプルを開放されたコンテクストにおいて把握するということに加えて、アナロジカルな意味も大きい。イメージング分光分析が対象とできるのは、人の感覚という点で言えば、視覚と触覚に関わる部分であり、聴覚や嗅覚については埒外である。また質量数の高い元素の分析に向くが、有機物の分析に向かないなどの特性もある。万能というわけにはいかないが、それでもイメージング分光分析が暗示するように、ある人の五感では感知できないが、他の人や有機体には感知できるものがあるという前提に立つことは、人とモノと関わり合い方を再考するための有効な戦略となり得る。そうした観点と分析技術によって、「モノ」そのものや、その生産、流通、消費を地球規模でとらえ、東・東南アジア地域の生存基盤の変容に関する研究に新たなダイメンションを加えようというのが本プロジェクトの狙いである。

イメージング分光分析による「モノ」のグローバルヒストリー

人とモノとの関わり合い方に関して、イメージング分光分析がアナロジーとして持つ意味を踏まえつつ、東・東南アジアにおける「モノ」そのものや、その生産、流通、消費を地球規模でとらえるため、2024年度は、セブ島で出土した陶磁器の非破壊分析を行うとともに、九谷焼や浮世絵を試料とするイメージング分光分析を行なった。セブ島での調査は、磁器や塗料の流通と消費を明らかにするための分析であり、九谷焼と浮世絵の分析は、釉薬や顔料の生産や流通、消費を地球規模で把握し、比較するための基準となる「教師データ」の収集を目的としたものである。

（1）フィリピン・セブ島における文化財分析

セブ島において中国や日本から輸入されたと考えられている磁器や、教会の天井、壁面装飾、収蔵絵画の分光データを収集した。日本国内の肥前や景徳鎮と比較することで、客観的な数値に基づく産地特定の可能性が開かれるとともに、これまで印象的な判断に基づいていた肥前と景徳鎮の色味や風合いの違いについても、分光学的な裏付けを得る可能性が出てきた。また教会の天井、壁面装飾、収蔵絵画については、現時点では予備的な検討を行なったに過ぎないが、文献資料とつき合わせることで、天井、壁面装飾、収蔵絵画において特定の色が選択される条件に関する分析や、東・東南アジアの塗料や絵の具の流通に関して新たな知見が得られる可能性が確認できた。

a）輸入肥前磁器（フィリピン国立博物館セブ分館）
b）輸入肥前磁器（ボルホオン教会）
c）天井及び壁面装飾（ボルホオン教会）
d）収蔵絵画（アルガオ教会）
e）輸入肥前磁器及び景徳鎮など中国磁器（Museo Parian de Sugbo）

これらの分析に加え、新たに文字の描かれた磁器のサンプルについても一次的なデータを収集した。

（2）九谷焼の断面分析

石川県工業試験場九谷焼技術センターとの共同研究において、センターから提供された上絵が剥離した九谷焼サンプルの釉薬の状態を調査するために、OCT（Optical Coherence Tomography: 光干渉断層撮影）法による陶磁器表面の分析を行った。OCTは物体内部の構造を非破壊で見る技術であり、文化財の分析への応用が期待されている。

（3）浮世絵に使用された顔料の調査

イメージング分光技術を利用し、浮世絵の染料分析を行った。染料の基本分析データと比較を行い、浮世絵に使用されている染料について考察を行った。

（4）Heritage Regime及び文化の所有権の文化研究

昨年度、本プロジェクトを進める過程で、本プロジェクトの先にHeritage Regime及び文化の所有権に関する文化研究の沃野が広がっていることが知覚できるようになってきた。本年度は、昨年度の成果を踏まえ、文化の所有権について東南アジアの事例研究を行うとともに、水中文化遺産としての第二次世界大戦期の旧日本海軍の喪失艦艇についての研究を行い、下記の研究報告を行なった。

Miyahara, Gyo “Who Owns Culture? On Cultural Ownership in Southeast Asia.” Enabling the future of Asian Studies: New Perspectives from Taiwan, Japan and the Region. CSEAS NCCU, Taiwan, Nov. 12, 2024.

Miyahara, Gyo “Japanese War Shipwrecks as Underwater Cultural Heritage in South China Sea and Philippine Sea.” Japan-Taiwan Relations Seminar. Osaka Gakuin University, Japan, Dec. 6. 2024.

（5）学問への扉

本プロジェクトに関わるテーマについて、以下の授業を行った。

（敬称略）

古代水銀朱の分析――旧練兵場遺跡（香川県）の発掘調査を通して
森下英治（金刀比羅宮　学芸課）

元素分析および同位体比分析から見た古代ガラスの産地と交易
田村朋美（奈良文化財研究所都城発掘調査部考古第一研究室［埋蔵文化財センター兼任］）

海を渡った民具
高木泰伸（大阪大学）

民具の失われた機能や用途を工学的に解析する
桃井宏和（元興寺文化財研究所）

美術作品の画材と科学
高田嘉宏（大阪大学）

分光について
清水俊彦（大阪大学）

文化財と分光分析
清水俊彦（大阪大学）

陶磁器のある暮らし――フィリピン諸島の場合
Jose Bersales（大阪大学）

戦間期の1930年代論と大阪綿業、大大阪の時代
秋田 茂（大阪大学）

考古学からみる古代の建築――瓦と屋根を中心に
岩戸晶子（大阪大学）

アジア架け橋プロジェクト

本プロジェクトを通して構築した「東アジア世界における「モノ的情報」研究拠点」を基盤に、エスノグラフィックなフィールドワークと自然科学と人文学の総合によってアジア太平洋地域を対象とする地域研究のさまざまな学術的課題に取り組む方法を学ぶ全学的な教育プログラムを立案し、試行を開始した。またあわせて、文理の枠を越えたグローバルリーダーを育成するためのクラウドファンディングを成立させ、プログラムにおいて学生が企画した研究計画のうち優秀な企画に対して助成を行い、次年度以降、フィールドワークと分光学的分析を組み合わせたプロジェクトを実施する枠組みを整備した。このプロジェクトがカバーする社会課題は、アジア太平洋の環境や社会、文化などに関する社会課題である。文系学生と理系学生がプロジェクトの立案段階から協働し、人類学のフィールドワークと、イメージング分光分析を中心とする科学的な分析手法を相互に学び合うことで、次世代の研究者、実務家の育成をめざしている。

フィリピン国立博物館（セブ分館）での分析風景

文字の入った磁器（360nm）の画像。人が感知できる限界の波長。

プロジェクト代表者
宮原 曉（大阪大学大学院人文学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）
清水政明（大阪大学大学院人文学研究科教授）
猿倉信彦（大阪大学レーザー科学研究所教授）
清水俊彦（大阪大学レーザー科学研究所准教授）
島薗洋介（グローバルイニシアティブ機構講師）
岡野翔太（大阪大学レーザー科学研究所特任研究員）
敖 夢玲（大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員）
高木泰伸（大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員）

プロジェクト構成員（学外）
野上建紀（長崎大学多文化社会学部教授）
吉田英樹（長崎県窯業技術センター 陶磁器科科長）
中野雄二（波佐見町歴史文化交流館学芸員／波佐見町教育委員会文化財班課長補佐）
BERSALES, Jose Eleazar R.（フィリピン・サンカルロス大学人類学科教授）
栗 建安（福建省博物院元研究員［定年退職］）
JIMENEZ VERDEJO, Juan Ramon（滋賀県立大学環境科学研究科／環境建築デザイン学科准教授）
豊島吉博（砥部むかしのくらし館館長）
広実敏彦（四国民具研究会副会長）
古賀瑞枝（周防大島町立久賀歴史民俗資料館学芸員／島の生活文化研究会学芸担当）

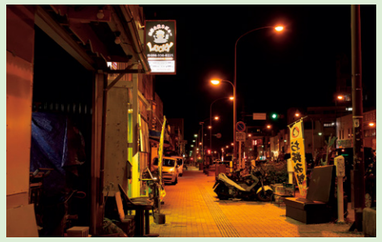
協力機関・連携機関
波佐見町歴史文化交流館
砥部むかしのくらし館
周防大島町立久賀歴史民俗資料館

拠点形成プロジェクト

2022年度採択 研究拠点構築型

21世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築

Facing the Challenges of 21st-Century East Asia: Establishing a Network for Practice-Oriented Area Studies



左：沖縄市コザ（2023年）
右：沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」（2024年）
（人間科学研究科博士後期課程 吉成哲平さん撮影）

プロジェクト概要

本拠点形成プロジェクトでは、非対称戦争とテロリズム、新型感染症と公衆衛生、環境問題や核管理、国境紛争と歴史問題、あるいは少子高齢化と社会保障など、緊急性を要する21世紀課題群と東アジアとの関係性に着目しながら、若手研究者の育成を軸芯に据えた現代中国研究の「対話型」研究プラットフォームの構築を目指しています。

本拠点形成プロジェクトの代表および参画メンバーが中心となる、有志の教員による「大阪大学中国文化フォーラム」は、2007年に組織化され、日本・中国大陸・台湾・韓国の国境を越えた学術交流である国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」（会議言語中国語）を十数年間にわたり主宰しており、息の長い人的交流を通じた対話の基盤を育んで参りました。

よってこのプロジェクトでは、この貴重な資源や濃厚な実績を多分に活かしつつ、地域研究の学際性を「近現代の軌跡と前近代からの逆照射」という歴史的射程から捉えることにより、更なるグローバルな文理融合的課題を、歴史学を機軸とする地域研究の総合化（課題群の整序と認識枠組の再検討）における不可分の領域へと再配置しながら、実践志向型地域研究へと昇華させることを試みています。具体的には、国際セミナー開催を中心に、学生・若手研究者の積極的な参加を促す多様な企画を立案し、また「研究と教育の有機的連携」の活性化を目指しながら、「21世紀課題群と東アジアの新環境」を切り口として、新たな領域横断的研究・教育のプログラムの創成を追求しつつ、その成果をより豊かな国際関係の創出と提案に向けて活かしていくことを希求しています。

2024年の取り組み・活動・成果等

東アジア地域秩序に関わる諸課題は、従来の国家間関係のもとではもはや解決しえないことを認識しつつ、私たちは、東アジアの国際公共財形成への基盤として、「人間の安全保障」にひとつの方向性を見いだそうと考えました。この間、資源・領土問題などを巡り東アジアの緊張関係が高まりつつある社会情勢において、一見すると難しいと思われる中でもface to faceの相互の信頼を糧に、一年また一年と国境を越えた対話を地道に続けてきた上述のプロセスがあるからこそ、私たちが身をもって実感するのは、21世紀の東アジア地域において、20世紀のような「戦争」により分断されることのない、紛争や対立を生み出さない「アジア地域史像」の構築であり、未来世代に引き継ぐべきことは、争いのない平和であるという願いを深めてきたのです。

その意思を貫く本拠点形成プロジェクトの取り組みは、今年度が最終年度の3年目にあたるため、総括の意味を込めた3回目の公開シンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承――アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ」を2024年10月26日（土）にオンラインにて開催しました。その趣旨に鑑み、「沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」」並びに「大阪大学中国文化フォーラム」に共催としてご協力頂きながら、国内外からおよそ100名のご参加を得ることができ、また時間を延長しながらの活発な議論が展開されました。

アジア太平洋戦争の終結から79年が過ぎ、戦争体験者の直接的な証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」へ入りつつある今日、未来世代への継承が喫緊の課題となっています。昨年2023年に私たちは、次世代を担う学生たちを主体としながら戦争・戦後体験の意味を問い、未来への展望を描いていくために「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」を立ち上げました。これまで長崎、沖縄、福島、水俣などの各地の現場で尽力する方々から多くの示唆を得る中で強く認識するに至ったのは、それぞれの地域に生きる人びとの営み続けてきた戦中戦後の「生活の現場」を重層的な歴史空間として連続的に捉え直していく重要性でした。その中で沖縄戦とその歴史を背負った現在について学ぶために沖縄へ、とりわけ冷戦下の1950年代に建設が本格化した嘉手納基地の門前町として発展する中で独自の文化を築いてきた街として知られる「沖縄市コザ」を訪れた際、沖縄が数世紀にわたり経てきた歴史の厚みを受けとめつつも、現在も同地で起きている出来事をめぐり、私たちは複雑な葛藤を抱かざるを得ませんでした。ただし、そうした私たちに対して、現地での貴重な出会いを頂くのみならず、様々な背景を持ってコザに暮らす一人ひとりの模索やエネルギーにより、この街がつくられてきたのだという戦後史を論してくださったのが、市史編集に日々尽力する職員の方々でした。そこには、これからの街をつくっていくために、コザに多くの人びとが訪れてその歴史を知ってほしいという、コザに暮らす人たちの視座による「コザの戦後史」の継承への願いが託されていました。それゆえに私たちは、ともすれば先の大戦を巡る歴史記憶が、ナショナリティや「加害／被害」の対立構図へと分断的に回収されがちであるものの、それぞれの地域に生きる人びとの営み続けてきた戦中戦後の「生活の現場」を重層的な歴史空間として連続的に捉え直していく重要性を強く認識するに至りました。

そこで本シンポジウムでは、沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」に関わりながら長年にわたり沖縄市史編集に尽力され、体験者の貴重な「語り」の聞き取りも行われている恩河尚氏と伊敷勝美氏にご登壇頂きました。そして学生たちの現場での記録写真と応答させながら、対話形式にて沖縄市の戦後史に関する貴重なお話を頂きました。続いて「戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の思想的営為」を基調とする研究成果報告を行いながら、それぞれの土地で戦中戦後の現実と向き合い続けながら営まれてきた生活者の思想的営為を、ポスト体験時代に生きる私たちがいかに受けとめつつ未来へと活かしていくことが出来るかについて、参加者の皆様と共に考え、熱量を込めた議論を交わすことができました。プログラムは以下の通りです。

第1部〈話題提供〉
コザの戦後史の継承が拓いていく未来への展望

モデレーター：吉成哲平（大阪大学大学院人間科学研究科DC）

①それぞれの土地の歴史を背負う現在から浮かび上がる東アジアとの結びつき
「記憶の継承の現場で展開される「戦後」を生きる人びとの複雑な経験」
「記憶の継承ラボ」の院生メンバー

②現場からのレスポンス
「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」
「沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」の取り組み」
恩河 尚（沖縄市史編集担当）
伊敷勝美（沖縄市史編集担当）

第2部〈基調報告〉
戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の思想的営為

① 生活の中で生まれゆく写真表現から「戦後」を捉え直す
「写真家たちが向き合った1970年前後の現実――「写真100年」の歴史から内省した現場での撮影表現の意味」
吉成哲平（大阪大学人間科学研究科DC）

② 国境移動の経験を通じて心身で受けとめていった重層的な歴史
「日中「二つの東北」の痛みと向き合いながら暮らす結婚移民の中国人女性たち――「単位制」の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ結び目となりゆく歴史実践」
王 石諾（大阪大学人間科学研究科DC）
ディスカッサント：小林清治（大阪大学人間科学研究科）

第3部〈総合討論〉
アジア地域史から共に考える私たちの暮らし

本シンポジウムの成果の総括については、例年と同様に、OUFC（Osaka University Forum on China）Booklet（三好恵真子・吉成哲平（編））（冊子体・電子版）として本年度末の発刊を予定しています。またシリーズを総括した書籍の出版も引き続き検討していきたいと思います。なお、本プロジェクトに関連するウェブサイトも公開しており、随時活動を更新しておりますので、併せてご確認頂けますと幸いです（https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp）。

今後の展望・展開・課題

冷戦体制終結後の1990年代以降の日本では、敗戦を起点とする民主主義や平和、経済的繁栄に支えられてきた「長い戦後」意識が次第に相対化されていく中で、東アジアの近隣諸国との間でのアジア太平洋戦争の歴史認識をめぐる和解への取り組みが徐々に進んできました。しかし、2000年代の東アジアの共同歴史研究の過程で「正義」をめぐる、それぞれの国の間の隔たりが顕在化し、相互の歴史和解を依然として困難なものとしています。それゆえに、東アジアにおける歴史和解を進める上でとりわけ重要となる「謝罪」、「共同歴史研究」、「戦後補償訴訟」、そしてそれに加え、アジア地域の交流に共通する土台を探す必要性が、国際的にもいままさに提起されています。

そこで私たちは、国家による加害や被害の歴史に回収しえない、戦中・戦後の一人ひとりの思想的営為を当事者と共に切り拓いてきた「伴走者」の模索とその実相に深い敬意を払いながら、ポスト体験時代の記憶の継承について、アジア地域史の視座から対話の可能性を願いつつ、本拠点形成プロジェクトの終了後も、次世代とともに、その連帯に向けての可能性に目を向けてきたいと思います。

プロジェクト代表者
三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）
許 衛東（大阪大学大学院経済学研究科准教授）
高橋慶吉（大阪大学大学院法学研究科教授）
豊田岐聡（大阪大学大学院理学研究科教授）
宮原 暁（大阪大学大学院人文学研究科教授）
小林清治（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）
林 礼釗（明石工業高等専門学校教養学群助教／大阪大学大学院法学研究科招へい研究員）
胡 毓瑜（大阪大学大学院人間科学研究科助教）
岡野翔太（神戸大学大学院人文学研究科助教／大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員）

プロジェクト構成員（学外）
鄒 燦（中国南開大学日本研究院副教授）
江 沛（中国南開大学歴史学院教授）
許 育銘（台湾国立東華大学歴史学系副教授）
柳 鏞泰（韓国ソウル大学校歴史教育科教授）
周 太平（中国内モンゴル大学モンゴル学学院教授）
丸田孝志（広島大学大学院人間社会科学研究科教授）
福田州平（香港大学専業進修学院・人文及法律学院・学院助理講師）
田中 仁（公益財団法人東洋文庫研究部研究員［大阪大学名誉教授］）

拠点形成プロジェクト

2022年度採択 研究拠点構築型

オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究

Collaborative Research into the Preservation, Accessibility, and Use of Oral History Resources

プロジェクト概要

本プロジェクトでは、聞き取りを通じて当事者の記憶と経験を記録するオーラルヒストリーによって生まれた資料の「保存・公開・活用」を目指して、歴史学や社会学といった複数の分野にわたる研究者だけでなく、図書館関係者等さまざまな立場や専門性の持ち主が集まって共同研究に取り組んでいます。

人の語りは、単に過去の事実に関わる証拠のひとつというだけでなく、記憶や主観性、情動やパフォーマンスといった多様な側面から人間理解を可能にする貴重な資料です。近年では、「まちづくり」に活用されたり、芸術的創作に関連する活動でも用いられるなど、豊富な展開例が存在します。

本プロジェクトの遂行により、これまで安定的に保存できていなかった資料を守り、活用する基盤が形成され、より豊かな学術的・文化的な創造を可能にするという意義があります。また、聞き取りに取り組みたい市民を積極的に支援し、市民社会の発展に貢献することを目指しています。

2024年度の取り組みと成果

メンバーの関連する成果物

前回2023年度年次報告書以来、以下のような関連する仕事に取り組んできました。

プロジェクト代表者の安岡健一は、聞き取りなど自己を言葉で表現する営みの歴史について市民向けの講演やシンポジウムなど取り組み、学会紙でオーラルヒストリーについて執筆しました。これらを通じて、関心を共有するつながりが形成され、プロジェクトの実施に大いに役立ちました。

【著作】

- **安岡健一**「新刊紹介『コロナ禍の声を聞く』」『日本オーラル・ヒストリー研究』20号、2024年11月、314–317頁
- **安岡健一**「オーラルヒストリー問答：アーカイブ編」『歴史評論』892号、2024年8月、40–50頁
- **安岡健一**「歴史学者の職能とオーラルヒストリー」『歴史科学』257号、2024年5月、2–15頁（昨年の大会報告を原稿化したもの）

【講演】

- 「オーラルヒストリーに関する研究活動と今後の展望」（インターネット時代のオーラルヒストリー研究会、2024年7月18日、大阪府大阪市）
- **安岡健一**「地域におけるオーラルヒストリーの可能性」（国立歴史民俗博物館　国際シンポジウム「歴史資料の多様性を問い直す」、2024年10月25日、千葉県佐倉市）
- **安岡健一**「市民による地域オーラルヒストリーの可能性を拓くには」（歴史工房やまと第6回ワークショップ、2024年10月26日、神奈川県大和市）
- **安岡健一**「オーラルヒストリー入門」（堺市立東図書館歴史文化市民講座、2024年12月8日、2025年2月16日、大阪府堺市）

【国際シンポジウム】

2024年8月24日にオーラルヒストリーとパブリックヒストリーの代表的研究者であるMichael Frisch氏をアメリカから招へいし、国際シンポジウム「SHARED AUTHORITY――歴史を描くのは誰か」を、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点の共催で開催しました。この他「国際日本研究」コンソーシアムも共催になっていただきました。当日の内容についてはこのアニュアル・レポートの別ページで詳しく報告していますので、そちらをご参照ください。プロジェクトメンバーの**福島幸宏**（司会）、**菊池信彦**（発表「日本のDigital Humanitiesのこれまでとこれから」）、**五月女賢司**（コメント）、**安岡健一**（リプライ）が関わりました。

【学会発表】

- **松本章伸**（問題提起者）「映像制作における関係性の構築と実践的責任：テレビ、教育、アーカイブの現場からの学び」、2024年秋季大会ワークショップ「映像の説明責任をめぐって」（オンライン）、**石田佐恵子**（提案者）、**大橋香奈**（問題提起者）、日本メディア学会 2024年10月26日

以下では、プロジェクトで掲げた関心事項についてそれぞれに対応する活動を記載していきます。

オーラルヒストリー・アーカイブ・プロジェクト研究会の継続的実施

研究会を継続的に実施しました。2024年4月27日、第5回研究会「世界のオーラルヒストリーデジタルアーカイブ：「デジタル公共文書」の視点から」を武田和也氏（国立国会図書館）を講師に開催。インターネットを用いたオーラルヒストリーの活用などについて学びました。年度内に第6回・第7回研究会を開催予定です。

聞き取りに取り組む市民グループとの連携

神奈川県大和市で活動する「歴史工房やまと」のワークショップに参加し、講演をしました（右ページ写真左）。地域でのオーラルヒストリーの実践においては、どのように実施し

保存するのかなど様々な課題があります。今後も地域の連携を作り出していけるよう、取り組みを進めます。

資料館（アーカイブ）や図書館における資料管理方法の提案

大阪府堺市東図書館と連携し、図書館におけるオーラルヒストリーの保存に取り組んでいます。昨年度に取り組んだ万博関係の聞き取りを地域資料として所蔵する手続きを進め、2024年度には市民による聞き取りを実践的に学ぶ講座を開催します。市で作成した「東区かるた」を題材に、地域の記憶を住民が聞き取ります。公共図書館における地域資料の収集の一環として聞き取りが普及できるようにします。

2023年度の演習科目「オーラルヒストリー演習」の成果として、地域におけるコロナの記憶を扱った報告書『同時代研究』を作成し、吹田市立博物館ほかに寄贈しました。吹田市立博物館には語り手の紹介など多大な協力をいただきました。

オーラルヒストリーを行う／オーラルヒストリー資料を用いた教育実践

(1) 前回報告書刊行後のイベントとして、『コロナ禍の声を聞く』関連で、大阪大学出版会・関西学院大学出版会が共催するシンポジウム「災禍の聞き取りを本にする――出版プロジェクトから考える教育と研究の未来」（2024年3月20日、兵庫県神戸市）に参加しました。本学の学部生が取り組みについて発表しました。関西学院大学の金菱清ゼミ学生との対話において、大学生による聞き取りの意義についてディスカッションをしました。

(2) 大阪大学文学部／大学院人文学研究科の授業「文化交流史演習」「オーラルヒストリー演習」の実践を継続しています。2024年度は大阪大学の位置する豊中市にある岡町・桜塚商店街にて歴史を知る方々に聞き取りを実施しています。2022年度における本プロジェクトでの取り組み、寺本知さん関連の聞き取りの系譜にあるテーマです。地域での継続的な取り組みを重ねていきます。

(3) 大阪大学大学院人文学研究科の提供する専門科目「デジタルヒューマニティーズ基礎」にてゲスト講師として、オーラルヒストリーについて1コマの講義を行いました（2024年6月18日）。

(4) 国立歴史民俗博物館にて2024年10月～12月に開催された企画展「歴史の未来」の展示委員として安岡が関与し、長野県での聞き取り資料の展示などに取り組みました（上部写真右）。本企画展は歴博が取り組む「日本歴史文化知」の構築を目指すプロジェクトと連動しており、本研究プロジェクトも様々なデジタル人文学との交流ができる可能性を学びました。関連する国際シンポジウムで、大阪大学における教育実践を紹介しました。

その他

オンラインサロン「本の場」にて「自分たちで「歴史」をのこす――『コロナ禍の声を聞く　大学生とオーラルヒストリーの出会い』から学ぶ身近な歴史のつくり方」として話しました（2024年4月23日）。成果発表の形態として様々なメディアと協力していきたいと思います。

今後の活動予定

今年度で大阪大学における拠点形成プログラムの助成は終了しますので、民間の助成プロジェクトに応募しつつ自主的に活動を継続していきます。また大阪大学におけるデジタル人文学の展開と歩調をあわせることで、拠点化にむけて進める所存です。この他にも他分野との協働は着実にすすめていきます。

聞き取りの実践と保存・活用に取り組んでみたい市民、小・中・高等学校教員、社会教育関係の方々、また共同研究の希望者からの連絡をお待ちしております。

プロジェクト代表者

安岡健一（大阪大学大学院人文学研究科准教授）

プロジェクト構成員（学内）

菅 真城（大阪大学アーカイブズ教授）

プロジェクト構成員（学外）

五月女 賢司（大阪国際大学国際教養学部准教授）
福島幸宏（慶應義塾大学文学部准教授）
菊池信彦（国文学研究資料館准教授）
松本章伸（早稲田大学教育総合科学学術院［学振PD：2022年10月より学振CPD］）
山田菊子（ソーシャル・デザイナーズ・ベース）
大野光明（滋賀県立大学人間文化学部准教授）
小黒 純（同志社大学社会学部教授）
中村春菜（琉球大学人文社会学部准教授）
福山樹里（国立国会図書館）

拠点形成プロジェクト

2023年度採択 教育プログラム開発型

人文科学分野向け研究データ管理を促進するデジタル・ヒューマニティーズ学習教材開発

Developing Digital Humanities Educational Materials to Enhance Research Data Management in the Humanities

プロジェクト概要

本プロジェクトでは、人々が社会的な立場や国境、組織を超えて社会課題に取り組むための研究活動であるオープンサイエンスの実現を目指して、主に人文科学分野の研究者に向けて、研究データ管理や情報共有の概念を動画でわかりやすく伝える教材の作成を行っています。具体的には、2023年度に研究用画像の取り扱い環境を大きく改善する国際標準規格のIIIF（※1）（International Image Interoperability Framework、トリプルアイエフ）、2024年度にテキスト構造理解や比較、定量分析に重宝するTEI（※2）（Text Encoding Initiative、ティーイーアイ）の技術についての紹介と具体的な利用方法を解説する動画を作成しています。

IIIFとTEIに共通するキーワードは、インターネットとコンピュータを用いた「研究データの共有」です。どちらも各々の研究者が研究資料をどのように読んだのか、どこに注目したのかといった「視座」を後続の研究者に可能な限り具体的に伝えるために、人文科学研究者自身が参加するコミュニティが長期間にわたって開発してきた技術です。なぜなら、人文科学研究において、研究者が長年蓄積してきた貴重な研究データの引き継ぎや出所の管理については、世界中で大きな課題となっているためです。

しかしながら、コンピュータやインターネットでのデータの取り扱いに慣れていない多くの人にとっては、技術の習得コストが高くなりがちです。そこで、大阪大学では、国立情報学研究所の「AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」（※3）を通じて、人材育成を主とした研究データ管理体制の構築を推進しています。

2023年度は、研究データ管理およびIIIFを活用したオンデマンド学習教材「人文学研究者必見！研究データ管理ことはじめ：OUKAで始めるIIIF画像の公開と利活用」（※4）の開発を行いました。

本教材は、研究データの公開の重要性が高まる中、その管理と利活用に関して人文社会科学系の研究者および学生が直面する課題に焦点を当て、知識と実践的スキルを提供することを目的としています。この教材を通じて、学習者は研究発表や資金申請等に際し、研究データの公開および利活用を支障なく行える知識を獲得していきます。特に、人文科学の課題を情報技術で解決する学問であるデジタル・ヒューマニティーズの知見を活かし、研究場面での需要が高いIIIF形式の高精細画像を用いて世界中の組織で柔軟かつ効率的に閲覧・公開する標準的な枠組みを学びます。

例えば、受講者はIIIF画像の参照先と閲覧用ビューワーの使い方を学びます。本教材では、身近な事例として、OUKA（大阪大学学術情報庫）に登録された懐徳堂関連文書を利用した閲覧の仕方を取り上げました。一般に、ビューワーはウェブブラウザ上で動作し、サイトに設置されているものを利用できます。各ビューワーでの操作方法および機能はIIIFコンソーシアムで仕様が統一されているため、サイトやビューワーアプリが異なっていても直感的な操作ができます。

また、基本的な閲覧に留めるのではなく、IIIFならではの革新的な利用法についても具体的に説明しました。例えば、人文科学研究では類似の絵画や版本間の比較をするために複数の異なる組織をまたいだ画像の比較がしばしば必要になりますが、それをブラウザ画面上で手軽に行うための方法を可能な限り具体的に紹介しました。

その上で、IIIF画像を実際に有効活用する国内外組織の実践的な手法および応用可能性について代表的な事例を示しました。一例として、IIIF画像の一部分を切り取って擬似的に収集したり注釈を追加できるCuration Viewer（※5）（ROIS-DS人文学オープンデータ共同利用センター）を使った教育および研究事例について言及しました。

このほか、OUKAが進めているIIIF画像公開プロセスの紹介および解説についても少し踏み込んで紹介しました。OUKAのリポジトリに研究成果としての画像をOUKAに公開し所属組織に管理を委ねることで、個人で画像を長期間維持したり参照先を示したりする手間が大幅に省けます。

2024年の取り組み

前年度は画像取り扱いの利便性を劇的に高めるIIIF規格に関する教育動画を作成しました。2024年度は、前年度に引き続き、動画受講者の知識習得を確認する小テストおよびアンケートの作成、本学のE-learningシステムCLEへの動画登録および講義資料のアップロード、OUKAリポジトリへの動画登録などを行いました。また、動画のフィードバックを取得するため、同年度から開始した人文学研究科の共通教育科目「デジタルヒューマニティーズ基礎」で15名を対象に本動画の受講を課題にしました。その結果、受講者からはOUKAを含む主要デジタルアーカイブおよびIIIF画像の存在や研究への活用について動画で比較的容易に取得できたと概ね好評でした。

現在は、韻文や散文、書簡など多様なテキスト文の構造やキーワードなどを指定の形式にデータ化することで、研究者の関心に合わせて定量分析や体裁の変更などを実現するTEIと呼ばれる技術についての紹介と手を動かして学ぶハンズオンを行う動画を作成中です。ただしTEIは、単に動画を視聴するよりも、実際に自分でデータを作り簡単なプログラムを実行することでそのメリットを感じやすくなると考えられます。そこでハンズオンでは、無料のプログラミング環境ツールであるVisual Studio CodeおよびGoogle Colaboratoryのサンプルプログラムを操作しながら、実際にサンプルの詩をTEIに変換した後にブラウザで縦書き表示したり、すでに有志によってTEIデータが作られている文学作品を使って人間関係を自動で図示するプログラムを誰でも実際に動かせるようにしたりなど、プログラミング経験がない初心者に合わせて丁寧な説明を交えながらインタラクティブに学習するメニューを準備しています。

今後の活動予定

本プロジェクトでは、主に人文科学系の研究者に向けて研究管理の基本や研究の効率を大きく向上させるIIIFおよびTEIの概念を自身の研究にうまく取り入れられる教育動画を作成し、長期的には世界中の多様な背景をもつ研究者、学生に効率的に研究の視座を共有する考え方を広めていきたいと考えます。

今後は、学内だけでなく学外の研究者や研究支援者にも動画教材を受講していただくために、国立情報学研究所が運用するE-learningシステム［学認LMS］（※6）などの活用も検討する予定です。これによって、受講者の動画教材の視聴動向や、アンケート結果を蓄積し、教材のブラッシュアップを図っていきます。

※1 The IIIF Consortium (IIIF-C). “International Image Interoperability Framework”. https://iiif.io/（参照 2024-07-17）.

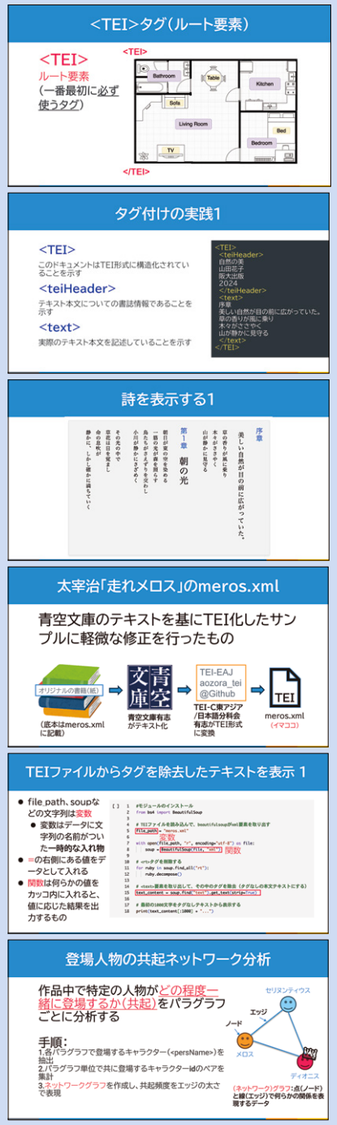
※2 “Text Encoding Initiative”. https://tei-c.org/（参照 2024-12-02）.

※3 研究データエコシステム構築事業運営委員会事務局. “AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業”. https://www.nii.ac.jp/creded/nii_ac_jp_creded.html（参照 2023-09-08）.

※4 吉賀夏子ほか. 人文学研究者必見！研究データ管理ことはじめ：OUKAで始めるIIIF画像の公開と利活用. 2024. https://hdl.handle.net/11094/97757（参照 2024-12-11）.

※5 “IIIF Curation Viewer｜ROIS-DS人文学オープンデータ共同利用センター(CODH)”. http://codh.rois.ac.jp/software/iiif-curation-viewer/（参照 2024-07-24）.

※6 “GakuNin LMS”. https://lms.nii.ac.jp/（参照 2024-12-12）.



現在作成中のTEIハンズオン教材のコンテンツ例

プロジェクト代表者

吉賀夏子（大阪大学大学院人文学研究科人文学林准教授）

プロジェクト構成員（学内）

田畑智司（大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻教授）

甲斐尚人（大阪大学D3センター准教授）

菅原裕輝（大阪大学大学院人文学研究科人文学林特任助教）

神崎隼人（大阪大学附属図書館研究開発室特任研究員）

協力機関・連携機関

大阪大学附属図書館

大阪大学コアファシリティ機構 データ利活用・DX化支援部門

拠点形成プロジェクト

2024年度採択 教育プログラム開発型

明治期における伝統日本法紹介の試み――日独法学者による『令義解』独訳計画

Meiji Attempts to Introduce Traditional Japanese Law to the West: On Joint Japanese/German Plans to Translate the *Ryō no Gige*

プロジェクト概要

このプロジェクトは、19世紀から21世紀にかけての西洋（欧米）における日本法研究史を描くことを最終的な目標としています。そして、そのなかでは欠かすことができない、20世紀初めに日本とドイツの法学者が協同して行った養老令の官撰注釈書である、右大臣清原夏野ら編纂の『令義解』（833年完成・翌年施行）の、ドイツ語翻訳事業の全貌を明らかにすることを目指しています。

19世紀後半、とりわけ幕末の「開国」を一つのきっかけに、日本社会のさまざまな文物が西洋社会で紹介されるようになりました。最も有名なのは絵画を中心とする芸術作品ですが、意外にも、「法」（＝伝統日本法）もその対象となりました。

伝統日本法の紹介を、初めてある程度まとまって行ったのは、明治政府の法律顧問を務め、司法省法学校や東京大学法学部で教鞭をとったフランス人弁護士のジョルジュ・アッペールだといわれています。そして、これはやがて、世界的に著名な比較法学者であるベルリン大学教授のヨーゼフ・コーラーの注目するところにもなりました。世界中の法を蒐集し、その比較を目指したコーラーは、かつてベルリン大学で学んだこともある東京帝国大学教授の穂積陳重（明治民法の重要な起草者の一人）に「日本古代法」の翻訳を依頼しました。困難な作業となることが予想され、なかなか陣容が固まりませんでしたが、穂積を中心に、明治38年から40年にかけて（推定）、複数の日本人法律家により『令義解』の翻訳が行われることになりました。

この事業に言及する書籍・論文は複数ありますが、資料にもとづいてその実態を示したものはありません（そのなかで、利光三津夫の論考は、多くの点を明らかにした優れた研究です）。本プロジェクトでは、これを（伝統）日本法の国際紹介の先駆的試みと捉え（このような見方は、コーラーと穂積の関係に注目し、日独法学交流の先駆けとした石部雅亮の研究に多くを負っています）、西洋における日本法研究史の冒頭に置かれるべきものとして、その背景、内容、帰結を、日独に残された資料を用いて可能な限り明らかにしていきたいと考えています。

2024年の取組み・活動・成果等

10月に研究会（オンライン）を行い、全体の研究目的及び内容を共有し、各人の研究テーマを確認したうえで、2025年3月に弘前市で資料の調査、及び同市内で次回研究会を行うことを決定しました。今年度は各人がそれぞれの研究テーマについて調査を進めましたが、初年であるため、論文公表、学会報告といった形での成果発表は出せていません（成果公表の最終的な目標は、これに関する書籍の刊行です）。そのなかで、最も進捗が見られたのは、『津軽英麿日記』の翻刻作業です。対面及びオンラインで4回研究会を行いました。

津軽英麿は、明治5年2月、元左大臣、明治政府でも議定などを務めた近衛忠房の第二子（兄は、後の貴族院議長の篤麿）として生まれました。祖父の元関白近衛忠熙に養育され、明治10年5月、元津軽藩藩主の津軽承昭の養子となりました。近衛家と津軽家は、縁戚関係があるといわれています。明治19年11月、一足先に留学していた兄篤麿の勧めにより、彼を頼って弟の鶴松（常磐井堯猷）とともにヨーロッパに渡りました。その後、英麿は、養父らによる再三の帰国要請を拒んで、長期にわたり（明治37年1月帰国）、主にベルリン大学に学びました。専攻は法学で、提出には至りませんでしたが（当時のドイツの大学には日本人留学生が学位を取得しやすい大学としにくい大学があり、ベルリン大学は後者であったと見られています）、博士論文として *Die Lehre von der japanischen Adoption*（『日本養子論』）を準備していました（同書は1903年にドイツで出版されました）。英麿が『令義解』の翻訳事業に関わることになったのは、ベルリン大学で彼を指導したのがコーラーで、また論文執筆のために資料を送付するなど支援していたのが穂積だったからです。ドイツ語翻訳は主に英麿の手で行われたといわれていますので、（当初は、ともにベルリン大学で学んだ池田龍一も翻訳作業に参加していました）、彼の残した資料の調査は、本プロジェクトにおいてきわめて重要な位置を有するものだと考えています。

津軽には伝記（羽賀与七郎『津軽英麿伝』陸奥史談会、1965年）がありますが、これに使用された資料の一部が弘前市にあります。特に重要だと考えられるのは、日記（明治37、41年、大正4、8年）です。『令義解』の翻訳がどのようにして行われたのかを直接示す資料はほとんど残されていませんが、あるいは、津軽日記の中に、その手がかりとなることが記されている可能性があります。そこで、明治37年の日記から読解を開始しました。

また、津軽とともに、作業に参加した廣池千九郎についての調査にも着手しました。中津に生まれ、苦学しながら法制史を学んでいた廣池がこの作業に参加したのは、穂積に師事していたからです。翻訳の中で彼が担った役割は、漢文で書かれた『令義解』を日本語訳する作業であったと推測されます。今年度は、2025年2月に廣池千九郎記念館を訪問し、同館所蔵の資料の調査に着手しました。刊行されているモラロジー研究所編『廣池千九郎日記第1巻　明治十九年―大正四年』（広池学園出版部、1986年）の中から関係する記事を探す作業を行いました。ただし、これについては、残念ながら適当なものを見つけることはできませんでした。

今後の展望・展開・課題

事業2年目となる2025年は、3月に弘前市で対面研究会を開催し、オンライン研究会を2回行う予定です。基本的には、今年同様、3つのパート（「ネットワーク調査」パート、「『令義解』邦訳調査」パート、「『令義解』独訳調査」パート）ごとに研究を進め、成果を出せるようにします。

比較的順調に進んでいる『津軽英麿日記』の読解については、2025年に、本プロジェクトの最初の成果としてその翻刻の公表を目指します。そのためにも、本プロジェクトに関心を持つ、くずし字読解に長けた歴史研究者（できれば若手）を加え、研究体制の再編成を図ります。津軽日記には、篤麿亡き後の近衛家の様子（後に総理大臣になる文麿も登場します）や、華族（当時英麿は、津軽承昭伯爵の養嗣子という立場でした）の日常生活も知ることができますので、多くの方に関心を持っていただけると思います。

また廣池千九郎については、記念館での調査を継続し、そのなかから、翻訳事業の詳細を知ることができる資料を見出すことを目指します。最も期待されるのは、主に廣池によって邦訳され、続けて津軽により独訳されたと考えられる『令義解』の翻訳原稿です。原稿は、穂積を通じて一部はコーラーのもとに送られたといわれていますが、現在所在がわかっていません。あるいは、控えの原稿が、廣池の旧蔵資料の中に残されているのではないかと推測しています（予備調査では、津軽の旧蔵資料の中に原稿やその控えはないようです）。

2025年からは新たに、穂積陳重に関する資料の調査を開始します。公表されている目録を用いた予備調査では、関連する資料は見当たりませんでしたが、翻訳事業の中心人物である彼に関する資料を精査していくことで、事業に関係する重要な情報を得ることができる可能性があると考えています。もう一つは、アッペールによるフランスにおける伝統日本法紹介の調査です。西堀昭の著作によると、アッペールも律令の翻訳（紹介）を行い雑誌に掲載していました。その詳細を確認するために、現地において調査をします。フランスでの調査は元々予定していなかったものですので、この作業を担当することができる研究者（できれば若手）に追加でメンバーに加わってもらうつもりです。

最後に、本プロジェクトの課題について述べます。メンバー全員が大学において教育・学内行政に従事し、また別の研究やプロジェクトも遂行しているため、本プロジェクトを実施するための十分な研究時間を確保することができていないというのが実態です。特に、ベルリンにおいてコーラー及び津軽ら留学生に関する資料の調査を行うために、在独の研究者（できれば若手）に依頼してメンバーに加わってもらうことを検討しています。研究体制を拡充すること、若手研究者を加えることは、採用時に審査員から付せられた問題点を解消するものにもなろうと考えています。

プロジェクト代表者

小野博司（大阪大学大学院高等司法研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）

的場かおり（大阪大学大学院法学研究科教授）

プロジェクト構成員（学外）

Urs Matthias ZACHMANN（ベルリン自由大学歴史文化学部教授）

矢嶋 光（名城大学法学部准教授）

拠点形成プロジェクト

2024年度採択 研究拠点構築型

キリシタン新出資料の多角的分析：トゥールーズ断簡を中心に

Analysis of Catholic Missionary Document Fragments Discovered at the Bibliothèque de Toulouse

プロジェクト概要

このプロジェクトは、2024年4月、フランス南西部にあるトゥールーズ図書館（Bibliothèque d'étude et du patrimoine, Toulouse）が所蔵する、キリシタン版『サカラメンタ提要』（*Manuale ad sacramenta ecclesiae ministranda*, 1605年長崎刊）の表紙補強材であった反古紙の断簡が発見されたことをきっかけに始まりました。この新出資料を「トゥールーズ断簡」と呼ぶことにし、本プロジェクトでは、①トゥールーズ断簡をもとに、キリシタン版制作のプロセスを解明すること、②トゥールーズ断簡以外の近年発見されたキリシタン文献を、言語・歴史・思想など複数の角度から再検討することの2点を目的としています。

トゥールーズ断簡は、『サカラメンタ提要』の校正刷、未知のキリシタン版国字本『あにゆすていの功力の次第』（仮題、1591年加津佐刊か）、キリシタン版『日葡辞書』（1603年本篇・1604年補遺長崎刊）の稿本、ポルトガル語およびスペイン語で印刷された、信徒による信心活動組織であるコンフラリア（信心会）の免償状を含みます。また、これらの断簡を表紙に収めていたトゥールーズ本『サカラメンタ提要』の本体も、存在は知られていたものの詳しい報告はなかったため、この本の調査・分析も研究計画に含めています。

トゥールーズ本
『サカラメンタ提要』標題紙
©Bibliotheque d'etude et du patrimoine

日本司教ルイス・デ・セルケイラの名のもと刊行された『サカラメンタ提要』は、現存本が、東洋文庫本・上智大学キリシタン文庫本など少なくとも10点が知られています。内容はラテン語と一部ポルトガル語・日本語を使って、カトリック教会のサカラメント（秘跡）を授ける典礼の次第を記したもので、典礼史・音楽史の資料として少なからぬ先行研究があります。また、楽譜などが黒・朱の二色刷りで印刷されていることから印刷史のうえでも注目されてきましたが、今回校正刷がはじめて現れたことにより、印刷工程を知る大きな手がかりが与えられました。校正刷だけでなくトゥールーズ本そのものも、料紙や刷りが現存する他本と異なるようであり、特殊な成立事情であったことをうかがわせます。

『あにゆすていの功力の次第』は今回初めて見つかった1枚であり、現存数がわずかである、1591年ごろから1598年ごろ漢字・ひらがな活字で印刷されたキリシタン版前期国字本に新たな１点が加わることになりました。冒頭、末尾などに欠損がありますが、『どちりいなきりしたん』（1591年加津佐刊か）など既知の他の前期国字本との比較により日本イエズス会の印刷技術の変遷、展開を推測できるばかりでなく、蜜蝋で作られた、イエズス・キリストを象徴する子羊の模様がある信心具Agnus Deiの功力を説いた本資料の文言が長崎県外海、熊本県天草などの潜伏キリシタンの間で伝承されていたことが判明しました。また、ポルトガル語で類似の内容が書かれた一枚刷りのパンフレットが、リスボンで刊行されていたこともわかっています。

トゥールーズ断簡『日葡辞書』
稿本No.01
©Bibliotheque d'etude et du patrimoine

『日葡辞書』稿本5点は、これまでオックスフォード大学ボドレイ図書館本、エヴォラ公共図書館本など版本しか存在が知られていなかった『日葡辞書』の、はじめて見つかった草稿です。版本と同様アルファベットで記された日本語の見出しにポルトガル語語釈が付されていますが、版本と比較すると、5点のうち4点は1604年に刊行された補遺の草稿であることが明らかです。加筆修正のあとが認められ、『日葡辞書』補遺印刷前の原稿作成過程をうかがい知ることができます。もう1点（No.01）はおそらく1603年刊行の本篇以前に作成された稿本の一部であり、『日葡辞書』刊行の以前、多くの草稿が作成されていたことの証左となりそうです。

ポルトガル語免償状・スペイン語免償状は、ヨーロッパで印刷され日本にもたらされたとみられ、ロザリオのコンフラリア（信心業としてロザリオの祈りを唱える人々の会）を対象に発せられたものです。免償（カトリック教会において、すでに赦免された罪に対しての、有限の罰に対するゆるしのこと。現代「贖宥」とも訳される。キリシタン時代はポルトガル語indulgenciaより「いんづるぜんしや」と呼ばれた）をめぐって、日本においてイエズス会と托鉢系修道会が対立していたこととの関連をうかがわせる資料です。

このように、トゥールーズ断簡は各分野において極めて高い価値を持っていますが、トゥールーズ断簡出現以前にも、近年初めて知られたキリシタン関連文献は少なくなくありません。たとえば、キリシタン版では、ルイス・デ・グラナダの著作の邦訳である『ひですの経』、南米ではじめて発見されたキリシタン版・リオ・デ・ジャネイロ本『日葡辞書』、前期国字本であるユトレヒト大学本『さるばとるむんぢ』、写本では、複数のキリシタン版にかかわったとみられるイエズス会士マノエル・バレトによる『葡羅辞書』、コレジオで行われた講義要綱の一部、天球論の日本語訳である、ペドロ・モレホン編纂の国字写本『スヘラの抜書』などです。これらの紹介は一通りなされているものの、言語や歴史の資料としての活用はまだこれからといってもよく、新たな視点での分析が期待されています。本プロジェクトではこれらに関する研究や、さらには、各地の図書館での未知の資料の探索も視野に入れつつ進めています。

2024年の取組み・活動・成果等

トゥールーズ図書館の協力を得ながら原本調査を行い、その成果をもとに下記（1）のワークショップを、日本学拠点の月例ワークショップの一つとして開催しました。

（1）「キリシタン新出資料・トゥールーズ断簡――日葡辞書稿本とキリシタン版国字本を中心に」

2024年8月6日［火］
（於大阪大学豊中キャンパス全学教育推進機構サイエンス・コモンズDAICEL Studio、ハイブリッド開催）

【報告】
岸本恵実「トゥールーズ断簡について」、「キリシタン版国字本「あにゆすていの功力の次第」
中野遙「日葡辞書稿本の分析と資料の意義について」

【コメント】
豊島正之「Toulouse日ポ辞書断簡の語学的特徴」
白井純「活字からみた断簡「あにゆすていの功力の次第」」

（1）の成果は、岸本・中野・白井・豊島による共著論文「キリシタン新出資料・トゥールーズ断簡――日葡辞書稿本とキリシタン版国字本を中心に」としてまとめ、紙およびwebにて公刊しました（『大阪大学大学院人文学研究科紀要』2、2025年3月）。

また、プロジェクトメンバーにより、下記（2）（3）の場で成果が報告されました。

8月6日ワークショップのフライヤー

（2）熊本県天草市・世界遺産市民講座「活版印刷の東西――世界遺産プランタン印刷所と天草コレジヨ」

2024年10月13日［日］（於天草コレジヨ館）
岸本恵実「新発見のキリシタン版国字本2点について」

羽田孝之氏（青羽古書店代表）による「【天草本】と同時代のヨーロッパ出版事情：ベルギーの世界文化遺産【プランタン印刷所】を手引きに」に続き、2点の新出国字版である、ユトレヒト大学本『さるばとるむんぢ』とトゥールーズ断簡の『あにゆすていの功力の次第』のについて最新の成果をとりいれた内容を、かつてキリシタン版が印刷された天草の地で伝えることができました。

天草コレジヨ館での市民講座

（3）第416回日本近代語研究会（2024年度秋季発表大会）

2024年11月2日［土］（オンライン）

黒川茉莉「日本イエズス会刊行語学書（稿本・版本）に見るpassivoとactivo――ロドリゲス『日本大文典』成立以前」
中野 遙・岸本恵実「トゥールーズ断簡・日葡辞書稿本No.01の特徴について」
白井 純「新出トゥールーズ資料からみたキリシタン版前期国字本の濁点活字について」

黒川発表は『日葡辞書』稿本にも用いられているpassivoとactivoという用語をめぐる変化を、日本イエズス会による複数の語学書の用例を検討しながら論じたもの、中野・岸本発表は『日葡辞書』稿本のうちNo.01の、他の稿本4点とは異なる独自の特徴を明らかにし、白井発表は新出の『あにゆすていの功力の次第』に濁点付き仮名活字が見られないことに注目し、前期国字本の濁点付き活字の分布の調査によって、印刷の工程や各資料の印刷時期を推測したものです。

この後、2025年１月には免償状に関するワークショップ（使用言語は英語、ハイブリッド形式）、3月にはトゥールーズ断簡全体に関するシンポジウム（使用言語は英語、ハイブリッド形式）のかたちで、国外にも成果を報告すべく、研究集会を開催する予定です。

今後の展望・展開・課題

2025年以降もトゥールーズ断簡を他資料と比較しながら個々の資料の特徴を明らかにしていきます。それと同時に、この資料の出現が既知のキリシタン資料全体の見直しを促すものであることから、国内外に広く成果を発信していきたいと考えています。トゥールーズ断簡に関する口頭発表は、研究会、シンポジウムなどでの意見交換ののち、日英併記の論文集としてとりまとめ、公刊する予定です。

2024年時点ではトゥールーズ断簡の分析にほぼ注力しているので、今後はこの資料を核としつつも、各メンバーの専門性に合わせ対象資料を拡げて分析していきたいと考えています。発信の方法についても、日本語で専門家に対して報告するだけでなく、本拠点で築かれてきた研究交流のネットワークも活用しながら、広く日本・日本学に関心のある人たちに英語でも発信していきます。

プロジェクト代表者
岸本恵実（大阪大学大学院人文学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）
岡島昭浩（大阪大学大学院人文学研究科教授）

プロジェクト構成員（学外）
黒川茉莉（日本学術振興会特別研究員［PD］／国立国語研究所外来研究員）
中野 遙（上智大学基盤教育センター特任助教）
Martin NOGUEIRA RAMOS（フランス国立極東学院准教授）
折井善果（慶應義塾大学法学部教授）
下岡絵里奈（トゥールーズ ジャン・ジョレス大学外国語学部日本語専任講師）
白井 純（広島大学大学院人間社会科学研究科教授）
豊島正之（上智大学名誉教授）
Carla TRONU MONTANÉ（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授）

拠点形成プロジェクト
2024年度採択 教育プログラム開発型

三木学の国際拠点形成
――哲学的人間学の可能性、人類学と協同主義の交錯と広がり

Establishing an International Miki Studies Center to Explore the Intersections Between Philosophical Anthropology and Corporatism

プロジェクトの概要

本プロジェクトでは、近年国外の日本学研究のなかで、日本哲学を代表する西田幾多郎のみならず、その弟子のひとりで、経済学、社会学、人類学とかかわりながら協同主義 corporatism の議論を戦前の日本で展開した哲学者、三木清への注目度の高まりをうけて、三木学と銘打った三木清研究の国際的拠点を形成することを目指しています。本課題ではこの状況に応じるべく、以下の点を目的として設定します。

1. 近年国際的に注目されつつある日本の哲学者三木清の事績について、領域横断型の国際研究拠点を形成すること。
2. 三木清研究（以下、三木学と呼称する）に資する大阪大学内の研究リソースを集約し、実質的な研究交流と推進を促進すること。
3. 大学間協定などに基づく国際的な研究リソースを三木学の拠点形成のために再編すること。
4. 新学術領域の創設に向けた下地を作るべく、領域横断（人類学、社会学、政治学など）を可能とする研究者を三木学の形成という観点から連携強化すること。

近年、同時代のフランクフルト学派やデュルケム学派との比較研究がすすむなかで、三木の哲学の国際的な独自性が徐々に再評価されつつあります。とくに本プロジェクトで注目するのは、彼の哲学のなかにおりこまれている社会学、経済学、人類学、政治学の綜合的知見であり、この点を領域横断的に解明することが目指されます。

三木清は、哲学という学問領域にとどまることなく、様々な時事情勢の分析や社会運動の組織化、政策提言会議などへの参加を行ってきました。そのため、それらの社会的実践を彼の哲学と密接に連携して理解し、同時に、その実践を現在の社会状況を踏まえて再活用することは、近年の大学が求められる社会連携の観点からも、参照するべき意義のあるものであると思われます。

本プロジェクトでは、国内外の様々な機会を利用しておこなわれるプロジェクト構成員らの研究成果を集約し、また研究会の開催などを通じて研究交流をはかることで、最終年度にはそれらの成果をまとめた書籍出版をめざしています。

2024年の取組み・活動・成果等

2024年は発足にあたって、資料の収集とネットワークの形成を中心に活動を行いました。それによって、近年国内外に生まれつつあるいくつかの三木研究の拠点との交流をもつことが可能になり、研究交流などをすすめる素地を形成することができました。

また本研究において期待される学術的成果には大きくふたつの方向性のものが期待されます。一つは、初期フランス哲学の隠れた導入者としての三木清という文脈を明らかにすることです。フランス哲学は従来、日本においては、1929年に京都大学哲学科に着任する九鬼周造によって本格的に導入されたと考えられています。またその後は、九鬼周造の弟子だった野田又男が京都大学で、澤瀉久敬が大阪大学でそれぞれ戦後の大学でフランス哲学を講じました。三木は1914年から1920年まで京都大学の西田幾多郎のもとで哲学を学んだあと、1922年からドイツ留学ののち1924年からパリに拠点を移し、そこでパスカル研究を行ったことが知られています。三木は同門で、九鬼の薫陶を受けた野田や澤瀉よりも一回りほど年長で、九鬼とは別系統でフランス哲学を取り入れた一人ということになります。その後も、パスカルのみのらず、とりわけ社会科学、人類学、民族学という文脈においては、フランスの学問的文脈への参照を続け、それが三木清の未完となった主著『想像力の論理』のなかで重要な役割を果たすことになります。とくにフランスの習慣論の哲学的文脈と人類学における制度論の文脈の接続など、重要な論点を多数含むものが形成されます。また、注目されるのは、この1924年時期のフランスにおいて、パスカル研究というとレオン・ブランシュヴィックのそれが知られているわけですが、同時にフランスでは哲学と社会科学の横断的な研究や、研究人材の横断的交流が盛んにおこなわれていました。三木清がそういうところからどのぐらい影響を受けていたのかは定かではありませんが、書簡などの調査を進めていくことで明らかにできることがあるかもしれないと考えています。

本年度中に、研究報告会を開催するとともに、論文の執筆と投稿をすすめ、来年度での発展にむけて準備を進めていきたいと考えています。

今後の展望・展開・課題

来年度からは本格的に、国内外のネットワークをいかした研究会の共同開催などを進めていきたいと考えています。また、西田研究や九鬼研究などとの比較も行えるよう、国内外の研究者に広く連携でいできる体制をとりたいと考えています。

プロジェクト代表者
近藤和敬（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）

プロジェクト構成員（学内）
斉藤弥生（大阪大学大学院人間科学研究科教授）
山崎吾郎（大阪大学COデザインセンター教授）
織田和明（大阪大学大学院情報科学研究科特任助教）

プロジェクト構成員（学外）
檜垣立哉（専修大学文学部教授）
Thierry HOQUET（パリナンテール大学教授）
Elie DURING（パリナンテール大学准教授）
LIAO, Chin-Pin（中山大学哲学科教授）
玉田龍太朗（滝川中学校・高等学校教諭）

協力機関連携機関
専修大学
パリナンテール大学
中山大学

三木清
出典：『三木清著作集 第5巻（哲学諸論稿）』岩波書店、1949年

コラム

日本の「日本」とアメリカの「日本」

成田龍一
（日本女子大学名誉教授）

奇妙なタイトルを付けたが、日本における日本研究と、アメリカにおける日本研究との関係の考察である。前者――ナショナルヒストリーとしての「日本史」は、アメリカでは地域研究――外国史として考察されるが、両者のあいだにはいかなる関係が生じているかということである。

そのことをめぐって、もう30年も前となるが、アメリカの大学で教鞭をとっていた酒井直樹さん、タカシ・フジタニさんとともに「アメリカの「日本」――アメリカからの声」と題する鼎談をしたことがある（『現代思想』1995年9月）。おりから、日本とアメリカの歴史学研究があらたな動きを見せていた時期であり、1990年代中葉の意義を探ることを目的としていた。そして、アメリカにおける日本研究の軌跡として、「3つの潮流」を確認する。

A 近代化論：マリウス・ジャンセン、細谷千博編『日本における近代化の問題』（1968年）の諸論稿がその内容をよく示している。
B 近代化論批判：金原左門『「日本近代化論」の歴史像』（1968年、増補版第二版、1974年）が、ピーター・ドゥース、入江昭、テツオ・ナジタらを紹介している。鼎談で、フジタニは「コンフリクト」の歴史研究（とくに一揆研究）であることを強調した。
C 近代批判：「日本」という対象自体を問う研究であり、啓蒙主義批判でもある。ハルトゥーニアンが代表的であり、酒井がこの方向を推進する。

このとき、鼎談において、日本においても3つの潮流があることをあわせ議論した。
A 戦後歴史学：遠山茂樹、井上清、家永三郎、永原慶二
B 民衆史研究：色川大吉、鹿野政直、安丸良夫、ひろたまさき
C 現在進行形であり、まだ「名無しのスクール」

ことは「戦後」の枠組みと対応している。すなわち「戦後」の枠組みをなぞる（A）、その修正としての（B）、その双方を批判し、「戦後」を相対化する（C）という関係のもとでの動きである。アメリカと日本でのⅢが互いに共振することが、鼎談での指摘の眼目であり、「国境」と「専門」のふたつの境界からの越境によって、国民国家＝近代の枠組みが問題化される、との認識であった。だが、かかるCの動きに対し、日本においてはAおよびBからの反発も強かった。日本においては、まだAおよびBが圧倒的主流であり、Cへの忌避が強かった。他方、アメリカではCへの方向が目立っている、というのが鼎談に臨んだときの私の実感であった。

その様相を鼎談ののちに刊行された著作――アンドルー・ゴードンが編集した“*Post War Japan as History*”（カリフォルニア大学出版、1993年）において探ってみよう。日本語訳は、『歴史としての戦後日本』（上下、みすず書房）として、2002年に刊行されたが、英語版と日本語版では「戦後日本」の歴史像にかなりの温度差がある。

英語版が4部立てで、それぞれタイトルが付されていたのに対し、日本語版では3部立てで、タイトルを省いている。なによりも、収録された論文が、英語版16本のうち、日本語に翻訳されたのは9本にとどまる。PART I　CONTEXTSからはすべて翻訳、PART II　POLITICAL ECONOMYおよび、PART IV　DEMOCRATIC PROMISE AND PRACTICEからは2本が翻訳されていない。PART III MASS CULTURE AND METROPOLITAN SOCIETYは、採録が1本のみとなっている。

すなわち、英語版から省かれたものは、5章（ガリー・アリンソン *The Structure and Transformation of Conservative Rule*）、7章（コウジ・タイラ *Dialectics of Economic Growth, National Power, and Distributive Struggles*）（以上Ⅱ）、9章（マリリン・アイビー *Formations of Mass Culture*）、10章（チャールズ・ユージ・ホリオカ *Consuming and Saving*）、11章（キャサリン・ウノ *The Death of “Good Wife, Wise Mother”?*）（以上Ⅲ）、13章（サンドラ・バークレイ *Altered States: The Body Politics of “Being-Woman”*）、16章（ジェームズ・ホワイト *The Dynamics of Political Opposition*）である（以上Ⅳ）。

この結果、日本語版の目次は、

【上巻】
「序論」＋「日本語版のための書下ろし」（1999年）
　アンドルー・ゴードン
第一部
「二つの「体制」のなかの平和と民主主義――対外政策と国内対立」ジョン・ダワー
「世界システムにおける日本の位置」
　ブルース・カミングズ
「現在のなかの過去」キャロル・グラック
第二部
「成長即成功か――歴史的にみる日本の経済政策」
　ローラ・ハイン
「社会契約の交渉」
　シェルドン・ガロン／マイク・モチズキ

【下巻】
第三部
「都会における場の発見――イデオロギー、制度、日常生活」ウィリアム・ケリー
「社会的弱者の人権」フランク・アパム
「職場の争奪」アンドルー・ゴードン
「知識人と政治」J・ヴィクター・コシュマン
「監訳者あとがき」中村政則

という構成となる。

日本語版における「政治経済」と「社会構造」への関心の高さとともに、それに反する「文化」と「メディア」への関心の低さ、生活史やジェンダーの稀薄さがうかがえる。また、日本語版においては1960年代の高度経済成長を肯定的に扱い、英語版での経済成長の政策に対する批判が弱い論稿を落としている。英語版が高度経済成長を肯定のまなざしでみすえたうえで論点を提出する姿勢を有するのに対し、日本語版は「悔恨共同体」（敗戦後の民主主義）を基準として再構成されている。英語版の部立てと章の並びは変更されていないものの、英語版のⅢの動きが、日本語版ではⅡに近似したⅠに回収されているように映る。英語版は、現代・分析としての戦後・日本史像であり、日本語版は、近代史の延長としての日本・戦後史像として映る。「日本の日本」と「アメリカの日本」との温度差がうかがえるのである。

本書から、いまひとつの例を挙げてみよう。ヴィクター・コシュマン「知識人と政治」は、a「知識人と民主革命　1945－55年」、b「安保危機の時代の知識人　1955－65年」、c「管理社会における抵抗と理論　1965－75年」、d「ポストモダンの両義性とニューアカデミズム　1975－88年」という構成をもつ。a b（「戦後日本」）とともに、cd（「現代日本」）にも言及していること、（前者の基調をなす）「マルクス主義」とともに、（後者を代表する）吉本隆明、山口昌男らへの目配りを有していることが特徴的である。

日本における「日本」が基本的に「戦後思想」に立脚し、「現代思想」に冷淡であったことは、たとえば『展望　日本歴史24　思想史の発想と方法』（東京堂出版）が2000年の刊行にもかかわらず、AとBになじみの深い対象の考察にしか目を配らず、分析方法においてもCを圏外に置いていることによく見て取れよう。

このことに反するように、コシュマンは「戦後民主主義、そして普遍的な知と啓蒙の管理人としての知識人の役割への幻滅」を指摘する。「左翼ナショナリズム」（吉本隆明、谷川雁）と「右翼ナショナリズム」に着目し、小田実による「「国家民主主義のシステム」が非人道的である」との指摘に管理社会批判を見出す論稿を提供している。

さらにコシュマンは、1980年代の議論をも分析対象とし、「新保守主義的なポスト戦後文化評論」を批判し、それらが「戦後日本思想だけでなく近代思想や近代文化一般を拒絶しながら、「国際化」を固有の文化遺産の強調と結びつけた」との見解を示す。「ニューアカ」によって「知識人と大衆という戦後の二項対立が浸食」されこと自体を問題化し、「ポストモダンの両義性」を論じた。かかる対象までをも歴史学の議論として提供するアメリカの「日本」に対し、日本の「日本」はなんとも及び腰である。不幸なことに、この温度差は、30年を経た2020年代の〈いま〉でも変わっていないように思う。

大阪大学では、専門的な「知の探究」のみならず、「知と知の融合」「社会と知の統合」を促すため、「学際融合・社会連携を指向した双翼型大学院教育システム」(Double-Wing Academic Architecture: 通称DWAA) を導入しています（https://itgp.osaka-u.ac.jp/systems/dwaa/)。諸部局を横断する組織としての本拠点は、このシステムに基づいて、「大学院等高度副プログラム」「人文社会科学系オナー大学院プログラム」に、「知と知の融合」「社会と知の統合」を促す横断型の教育ユニットを提供しています。

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」

プログラム紹介

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」（英語名Global Japanese Studies。以下、GJSプログラム）は、日本研究の最先端の成果を学祭的に学ぶとともに、そのコンテンツを英語で発信するためのスキルを高めることを意図して2017年に開講した教育プログラムです。現在、人文・社会科学系部局の協力のもと、グローバル日本学教育研究拠点により企画・運営されており、文系・理系を問わず、日本研究の最先端を学び世界に発信したい大学院生を対象としています。以下の3つの到達目標に対応する形で、科目が構成されています。

プログラムの到達目標（修了時に身に付く能力）

①複数の分野の日本研究の最新の成果を理解している。
②海外の日本研究の最新の動向を踏まえて議論することができる。
③日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身に付けている。

①の目標に対応して提供されているのは、日本の日本研究の最先端の成果を日本語で講じる講義科目で、②③の目標に対応して提供されているのは、英語圏の日本研究の最新の成果を学ぶ講義科目と、自分の研究成果を英語で発信する力を高めるための演習科目です。

受講生からのメッセージ

北村都和
人文学研究科日本学専攻 博士前期課程2年

私は日本史学分野に所属しており、なかでも日本の特定の地域について研究しているため、大学院に進学してから海外のことに触れる機会はほとんどありませんでした。しかし一方で、「日本が他国からどのように見られているか」にも興味があったため、GJSを履修しました。自分の研究だけをしていたら少なくとも発見することがなかった、新たな観点を見出せられることが大きな特徴だと思います。特に、海外をバックグラウンドに持つ学生との交流は、自分の今までの経験が持つ意味を再確認させてくれるものでした。また、プレゼンをする際には「自分は誰に何を伝えたいのか、どうしたら伝わるか」について深く考える必要がありました。社会に出るにあたっていずれ必要になるスキルを、このプログラムでは様々な学びや議論から身につけることができました。

Tetiana TKACHENKO
人文学研究科日本学専攻 博士前期課程2年

「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラムでは、さまざまな分野のコースを幅広く提供しています。それゆえに、自分の研究に直結した授業と、知識の幅を広げるための授業の両方に出席することができました。歴史、文学、民族学に興味があるので、それらに関連する授業に参加できたのはとても嬉しかったです。また、このプログラムのおかげで、大阪大学の教授だけでなく、他大学の客員教授の講義も受けることができました。もう一つの利点は、英語と日本語の両方の科目を選択できることです。また、講義科目だけでなく演習科目もあるため、アカデミック論文を英語で書くための具体的な知識や実践的なスキルを身につけることができました。

授業担当教員からのメッセージ

Nicholas LAMBRECHT
人文学研究科准教授／
グローバル日本学教育研究拠点（グローバル拠点形成部門）兼任教員

担当科目
Introduction to Contemporary Japanese Studies 1: “Interacting with Japanese Culture”
Introduction to Contemporary Japanese Studies 2: “The Japanese Short Story”
Advanced Academic Skills for Humanities 1: “Writing Research Papers”
Advanced Academic Skills for Humanities 2: “Presenting Research”
Issues in Contemporary Japanese Studies 1: “The Borders of Japanese Literary Studies”
Issues in Contemporary Japanese Studies 2: “The Practice of Translating Japanese Media”（3月まで）
Basic Academic Skills for Humanities 2: “Reading for Discussion”（3月まで）

今年開講したグローバル・ジャパン・スタディーズ科目は例年に比べ少なかったものの、各科目に多くの学生が受講し、ディスカッションは尽きることがありませんでした。GJS科目では、英語圏で行われている日本研究について共に考察し、批判し、時には賞賛するプロセスが、私を含め授業に参加する全員の視野を広げることに繋がると確信しています。また、日本文学関連の科目は、文学と歴史・文化の関係や、翻訳にまつわる諸問題などについて深く考える機会となりました。さらに、毎年のことながら、Advanced Academic Skills科目で学生と共に修士論文・博士論文の研究方法、研究内容、論文構成について議論を重ねる中で、学生の研究テーマに対する熱意が伝わり、強い感銘を受けています。研究成果をグローバルな場で（とりわけ英語を通じて）発信したい学生が年々増加していることから、来年に担当するGJS科目を再度増やし、次世代の研究者の育成に貢献したいと考えています。

Facundo GARASINO
グローバル日本学教育研究拠点（グローバル拠点形成部門）特任講師

担当科目
Basic Academic Skills for Humanities 1 & 2: “Reading for Discussion”
Issues in Contemporary Japanese Studies: “Global Migrations in Modern and Contemporary Japan”

今年は英語によるディスカッションの授業と講義を担当しましたが、グローバルな視点と現代的な課題を主眼として「日本」を問い直すための議論を提案しようと心掛けました。ディスカッションの授業では、人文学におけるアカデミック・スキルの基礎とも言える文献の解読に基づいた議論に必要な経験と技術を得ることを目指しました。その際、日本社会における移民や人種主義、ジェンダー問題や社会格差、少子化問題や地域の過疎化、東アジアの緊迫した国際関係や歴史認識問題などを取り上げました。多様な発想と立場に触れたいという、積極的な姿勢を持った受講者が議論を盛り上げてくれました。一方講義では、移民を軸として日本の近現代の歴史をグローバルな視点から考え直すための論点の提示を試みました。ここでも、歴史的な事象と現代社会との接点をめぐる議論をすることが多くありました。このように、今年の授業を通して、学生の関心と視点がすでに多様化・国際化していることを実感できました。これらの関心と視点をさらに発展させるべく、来年はGJS科目の内容を一層充実させ、本プログラムに期待される役割の達成に貢献したいと思います。

教育プログラム

大学院等高度副プログラム「デジタルヒューマニティーズ」

令和6年度の大学院等高度副プログラム「デジタルヒューマニティーズ」は、人文学研究科（人文学林・言語文化学専攻）を幹事部局とし、グローバル日本学教育研究拠点の協力を得て実施しています。人文学林の開講科目「デジタルヒューマニティーズ基礎」（豊中、箕面の両キャンパスで2コマ開講）、「デジタルヒューマニティーズ演習」（秋学期）、および言語文化学専攻の専門科目「デジタルヒューマニティーズ（テクスト分析論）A・B」、「デジタルヒューマニティーズ（言語処理と情報検索）A・B」、「デジタルヒューマニティーズ（データ解析）B」を核に、関連科目である言語統計学A・B、史的言語研究A・B（いずれも言語文化学専攻）、行動統計科学特講I（人間科学研究科）、法政情報処理（法学研究科）、テキストマイニング論【旧科目名：知識・情報マネジメント】（経済学研究科）、特殊講義（Social Science Research Methods）（国際公共政策研究科）など、提供科目は人文・社会系に広くまたがり計16科目にのぼります。

デジタルヒューマニティーズは、伝統的な人文学（ヒューマニティーズ）とデジタルとの有機的な結合により、人類知の取得、解釈、比較、参照、表現の方法などの再構成に取り組む分野横断的な研究・教育領域です。本プログラムは実証主義的なフィロロジー、言語研究、文化研究を基盤として学修するのに加え、文字や紙媒体だけでは不可能な史資料の理解やテクストの読み、エビデンスの可視化（visualization）、独創的なリサーチクエスチョンの創成、そして方法論的共有地（methodological commons）に基づく協働（interoperability & collaboration）などを通して、人文知の新地平を切り開く取り組みであると言えるでしょう。テクストや史資料に最新の解析技術を応用することにより、従来のリニアなアプローチだけでは不可能な現象の把握や価値の発見、エビデンスの蓄積という営みを通して、人文学データを新たな角度から読みなおすこと、そしてそのような知見と洞察力を備えた次世代の研究者の育成を当プログラムは目指しています。

田畑 智司（言語文化学専攻・グローバル日本学教育研究拠点デジタル日本学部門兼任）

受講生からのメッセージ

鈴木七星
人文学研究科外国学専攻　博士前期課程１年

15回の講義を経て、DHとは無縁のように感じていた自分の研究テーマでも、活かせる部分があるかもしれないと考えるようになりました。特にデータベース構築や音声データのテキスト化、形態素解析に関しては自分の研究分野に積極的に取り込んでいきたいですし、今後増えていく（と願っています）スワヒリ語学習者の学習効率向上にも繋げていきたいと思います。

箕面キャンパスにいると、どうしてもスワヒリ語専攻の先生や学生など、ある意味狭い人間関係に留まってしまいますが、豊中キャンパスで外国学専攻以外の方々のお話を聞くことで、自分のテーマと実は近いことを他の言語でしているかもしれない学生さんの存在に気がつき、直接話すことができたので今後はそういった機会を大切にしていきたいと思いました。自分が発表することで、思わぬところについてご指摘いただいたり、自分のアイデアにはなかった提案をいただいたりすることができたので、インプットだけでなくアウトプットも積極的に行っていきたいと思います。自分の積極性の課題でもありますが、グループワークやディスカッションの時間がより多くなると、授業内容をさらに楽しむことができるのではないかと感じました。

山口杏奈
人文学研究科芸術学専攻　博士前期課程１年

この講義を受講しようと決意したきっかけは、春の説明会で拝見したDHの紹介動画でした。以前から興味を抱いていた分野であり、その内容は非常に魅力的でした。特に、私の研究分野に応用できる可能性があると感じ、新しい視点を得ることができると確信しました。

前期の基礎講義から後期の演習を通じて、第一線で活躍されている先生方の講義は毎回刺激的で充実した時間でした。実践的な授業では、デジタルに関する知識不足のために苦労したこともありましたが、それ以上に新しい知識を得ることへの好奇心と学びの楽しさが勝っていたと感じています。特に、スタートアップ相談会は他分野の先生方からアドバイスをいただける貴重な機会であり、具体的なアドバイスをいただけたことで、方向性が明確になり、大変有益な時間となりました。また、他の参加者の発表を通じて新たな視点を得ることができ、非常に多くの学びがありました。いただいたアドバイスは早速実践に移し、今後の研究に活かしていきたいと考えています。

令和6年度から人文学研究科共通科目「デジタルヒューマニティーズ基礎」および「デジタルヒューマニティーズ演習」の講義内容は大幅に刷新されました。以下に示すのは、それぞれの科目の概要と講義中の一コマを捉えたショットです。

デジタルヒューマニティーズ基礎

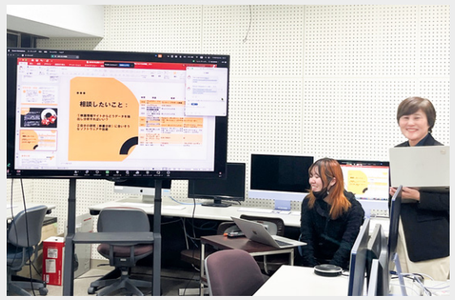
本講義は、人文学系の学生を対象としたデジタルヒューマニティーズ（DH）の入門科目です。本講義は、情報技術と人文学を融合する学際的な研究領域であるDHの基本概念に重点を置きつつ実践的な手法を学ぶ場を提供します。授業では、人文学の知識をデータとして取り扱うために必要な基礎知識として、著作権、認知バイアス、オープンデータ、メタデータ、情報の構造化、IIIF、AI、コンピューターと人間の脳の比較、時空間データなど多様かつ広範なトピックについて概説していきます。これらの基礎知識を獲得し、将来的に研究成果の共有を活用して新たな研究手法を模索する素地を養います。特に、講義の後半では、学生が自身の研究テーマを基にDHの可能性を探る「アイデアソン」を実施し、チームワークやプレゼンテーション力を養成します。

さらに、学内外でDHを実践している国内トップクラスのゲストスピーカーを招聘し、彼らの経験談と実際に行なっている研究について講義する機会を設けています。学生は、DHラボでの対面授業やオンラインでのコミュニケーションを通じて、双方向の学びを体験します。多様な技術に触れつつ、人文学の新たな可能性を見出すこの授業は、デジタル時代の学びを象徴する挑戦的なカリキュラムと言えます。

デジタルヒューマニティーズ演習

本講義は、情報技術を活用して人文学研究を深めるための実践的な授業です。講義では、プログラミングツールを扱う際に必要になるUNIXの基本操作、データベース操作コマンドとメタデータの関係、データの構造化に欠かせない固有表現抽出、IIIF画像の操作と応用など、DHに不可欠な技術が幅広く扱われます。これらの技術を基礎から習得するため、ハンズオン形式で実践的な演習が行われるのが大きな特徴です。

さらに、講義の最終回では、「DHスタートアップ相談会」が開催されます。これは、学生が自らの研究内容や研究環境、使いたいデータやツールについての「お悩み」をプレゼンし、他の研究者や受講生と意見交換ができる貴重な機会を提供するものです。これにより、受講生は具体的な課題解決方法に近づくきっかけを得る可能性があります。その一方で、DH研究に直結することにはならなくても、ひとりよがりになりがちな自分の研究や考え方を整理し他者と情報共有することの大事さを知ることができます。デジタル技術を活用と情報共有に重点を置いた人文学の新たな可能性を探るための、実践的かつコミュニカティブな学びの場ともなります。



DH演習「DHスタートアップ相談会」の様子。
当日助っ人として中川奈津子先生（九州大学）をお呼びしました。

撮影：吉賀夏子
（人文学研究科 人文学林・グローバル日本学教育研究拠点デジタル日本学部門兼任）

教育プログラム

人文社会科学系オナー大学院プログラム「グローバル日本学ユニット」

ユニット紹介

大阪大学大学院人文社会科学系オナー大学院プログラムは2024年度4月に開設されました。人文社会科学系部局の連携のもとに運営される知のジムナスティックスプログラムの1つです。所属する研究科での専門の学びと並行して、専門とは異なる人文社会科学の知見や、社会の様々な現場などで学べるカリキュラムが提供されています。オナー大学院生同士の研究科を超えた交流や、フィールド等への旅費支援のある授業なども用意されています（https://www.hsshonor.osaka-u.ac.jp/program）。

2024年度はグローバル日本学ユニットが設置され、最初の履修生を受け入れました。日本の人文・社会科学の最大の強みは、日本の言語・文化・社会などについての幅広く奥深い学術知が蓄積されている点です。大阪大学においては、この学術知を専門的に掘り下げる営みは、各研究科において、ディシプリン・ベースで行われています。その成果を踏まえつつ、本ユニットにおいては、この学術知の展開を、学際的に総合する方向、および、社会との統合を図る方向で促し、現代日本社会という現場において実践知を醸成します。また、並行して、外国語やデジタルの手法による研究発信力の強化を図り、日本という事例について深い理解を有しているだけでなく、日本から新たな研究の展望を発信することのできるスキルと創意をそなえたグローバル人材を育成します。

学際的な総合、社会との統合、研究発信力の強化が、本ユニットのキーワードです。

プログラムの概要［構成科目］

導入科目（「グローバル日本学への招待」）
日本学の新たな展開に受講者を導入するための必修科目です。本ユニットが構築された学術的背景を解説したうえで、人文・社会科学系の各部局の日本研究者がそれぞれのディシプリンを基盤としながら学際的・先端的問題提起を行います。あわせて、国際的研究発信力強化の意欲を高めるためのセッションを設けています。

基盤教養科目
学際的・国際的視野に立ち、先端的な課題意識に基づいて、日本の言語・文化・社会についての理解を深め、本ユニットの基盤となる知識を獲得・共有するための科目です。

アカデミックスキル・方法論科目
外国語やデジタルの手法によるアカデミックスキル、あるいは、各ディシプリンの高度な研究方法を磨くことにより、研究（発信）力の高度化を図ります。

フィールド・実践科目
フィールドでの学び、社会との関わりのなかでの学びを通じて、日本をめぐる学術知の社学連携的展開、実践知の醸成を促すための科目です。

国際学術研修科目（「国際学術研修」）
本ユニットの履修者が、国際的な学術会議において、学びの成果を母語以外の言語で発信する営みを積極的に支援するための科目です。所定の条件を満たすことにより単位として認定されます。

岩井茂樹先生に「グローバル日本学への招待」の
一回をご担当いただきました

授業担当教員からのメッセージ

Facundo GARASINO
グローバル日本学教育研究拠点
（グローバル拠点形成部門）特任講師

担当科目
グローバル日本学への招待

今年はこのプログラムの導入科目となる「グローバル日本学への招待」を宇野田先生とともに担当しました。そこでは、人文・社会科学の研究環境とキャリア形成の現状と展望を意識しながら、「日本」から／を研究するうえでの方法論、戦略や学術的意義を受講者に考えていただくための問題提起を行いました。その際、ゲストの先生方も含めた多様な専門分野と来歴を持った講師との対話を通して、受講者には学際的・国際的な文脈のなかでご自身の研究課題の位置づけと発信のための戦略を考えていただくことを目指しました。プログラムが今年に発足したこともあり、この授業の効果を計るためにはもう少し時間が必要ですが、国内外の学術大会等での研究発表を検討する受講者が出たことは頼もしく思います。今後は、この導入科目をはじめとして、プログラム全体が受講者の研究、博士論文の執筆とキャリア形成の基礎に貢献できるように尽力していきたいと思います。

2024年度人文社会科学系オナー大学院プログラム交流会

人文社会科学系オナー大学院プログラム主催で、2024年度交流会が開催されました。冒頭、本プログラム教務委員長の西森年寿教授から挨拶があり、交流会を通して知識の幅を広げることや、多角的な思考とネットワークの拡張などにつながることに期待する旨の言葉が寄せられました。

次に、ライトニング・トーク形式での履修生による研究発表が行われました。今回発表を行ったのは「グローバル日本学ユニット」の2名の履修生と、「社学共創ユニット」の5名の履修生の7名でした。履修生が自分の研究内容や進捗状況などに関して発表し、各発表に対して参加した履修生と、グローバル日本学教育研究拠点のガラシーノ・ファクンド特任講師と本プログラム事務局の徳永恵美香特任講師とを含む教員4名との間で意見交換を行いました。

最後に、「グローバル日本学ユニット」責任者の宇野田尚哉教授から、学生と教員双方にとっても良い交流の機会となったことや、ユニット数が6ユニットになる来年度の交流会への期待などが述べられました。

国際シンポジウム

SHARED AUTHORITY
歴史を描くのは誰か

［開催報告］

2024年8月24日［土］に、「SHARED AUTHORITY——歴史を描くのは誰か」を、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点と「国際日本研究」コンソーシアムや大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究」との共催で開催しました。開催場所は、大阪大学箕面キャンパス外国学研究講義棟1階外大記念ホールで、オンラインでの配信と併せてハイブリッド形式で行いました。参加人数は113名（うち体面参加が32名）でした。

Program

日時：2024年8月24日［土］10:00–16:30
会場：大阪大学箕面キャンパス
　　外国学研究講義棟1階外大記念ホール
　　（ハイブリッド開催）
使用言語：第1部・第2部
　　日英両語（日英同時通訳あり）

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
共催：「国際日本研究」コンソーシアム
　　大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
　　拠点形成プロジェクト
　　「オーラルヒストリー資料の
　　保存・公開・活用に関する共同研究」
後援：日本デジタルヒューマニティーズ学会
　　情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会
　　日本オーラル・ヒストリー学会
　　パブリックヒストリー研究会
　　国文学研究資料館古典籍データ駆動研究センター

10:00–10:10

開会の挨拶　宇野田尚哉（副拠点長／大阪大学大学院人文学研究科教授）

10:10–11:20

趣旨説明　安岡健一（大阪大学准教授）

司会＝福島幸宏（慶應義塾大学准教授）

10:20–11:20

第1部 キーノート・スピーチ

マイケル・フリッシュ（バッファロー大学名誉教授）
“From ‘A Shared Authority’ to ‘A Shared AI-thority’: A Paradigm Shift for Oral and Public History?”

11:20–12:15

コメント＝安岡健一　質疑応答

12:15–13:30　〈休憩〉

13:30–16:25

第2部 パネルセッション

パネリスト

菅豊（東京大学教授）
決して手放さない——「共有されたオーソリティ」の困難さと向き合うこと

菊池信彦（国文学研究資料館准教授）
日本のDigital Humanitiesのこれまでとこれから：
Shared Authorityの問題に寄せて

石川良子（立教大学教授）
Authorityを委ね合う——「ひきこもり」のライフストーリー研究を通して

ディスカッサント

五月女賢司（大阪国際大学准教授）

16:25–16:30

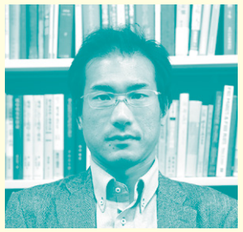
閉会の挨拶　岩井茂樹（副拠点長／大阪大学日本語日本文化教育センター教授）

Osaka University Global Japanese Studies Education and Research Incubator

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies

開催報告

安岡健一（大阪大学大学院人文学研究科准教授）



2024年8月24日（土）、アメリカからオーラルヒストリーとパブリックヒストリーの代表的研究者の一人である、マイケル・フリッシュ氏を招へいし、国際シンポジウム「SHARED AUTHORITY――歴史を描くのは誰か」を開催した。ハイブリッド形式で開催した本会には、対面・オンラインあわせて約140名の登録があり、高い関心が寄せられた。

シンポジウムを主催した大阪大学グローバル日本学教育研究拠点では、筆者が代表を務めるかたちで拠点形成プロジェクト「オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究」を2022年度から2024年度にかけて進めており（プロジェクトの活動については本レポートの20–21頁を参照）、本シンポジウムはプロジェクト最終年度の成果でもある。開催にあたっては、共催団体として「国際日本研究コンソーシアム」から財政的支援を受けるとともに、日本オーラル・ヒストリー学会、パブリックヒストリー研究会から後援をいただいた。

フリッシュ氏の提起した、Shared Authority という概念は、これまでは日本語圏の研究であまりなじみがなかったが、これを機にさまざまな議論がうまれることを期待している。フリッシュ氏には新たに加筆した原稿を提出いただき、また他の報告者・コメンテーターからも原稿を寄せていただき、2025年3月に刊行する予定の研究室紀要『日本学報』に特集として収録する予定である。ぜひそちらもご参照いただきたい。

開催にあたって掲げた趣旨は、以下のとおりである。

“1990年代以後は「記憶の時代」とも言われ、歴史的過去をめぐる国際的なコンフリクトが頻発している。それは同時に、歴史が持つ公的な意義への再認識がすすんだことを意味し、デジタル化を通じた歴史資料の共有と探求への市民参加は新たな可能性をも提供している。危機と機会の両面を有する現在において、歴史を誰が、いかに描くのかは、そもそも「私たち」とは誰かという問題と結びつく切実な主題であり、議論を積み重ねることが必要である。

実際、人文学・社会科学の分野において歴史叙述のあり方への反省を伴う潮流がいくつもうまれてきた。しかしながら、これらの潮流は、いままでの学術的な発展や蓄積の違いを反映して、必ずしも有機的に結びついてきたとはいえない。そこで、今回の国際シンポジウムでは、SHARED AUTHORITY という概念を提起し、学問の変革を理論的に支えてきた研究者であるマイケル・フリッシュ氏を招へいする。これまで十分に翻訳されてこなかった、その実践の経緯と現在を紹介していただくと共に、日本側での実践を共有し応答を試みる。

具体的には、パブリック・ヒストリー研究、オーラルヒストリー研究、デジタル人文学の諸分野をそれぞれリードする研究者をお招きし、それぞれの歴史と現状についてのご発表をいただく。

2002年に設立され、結成20年を迎えた日本オーラル・ヒストリー学会から現会長である石川良子氏（立教大学）に登壇いただく。日本におけるパブリックヒストリーについて、2019年に発足したパブリックヒストリー研究会の呼びかけ人である菅豊氏（東京大学）にご登壇いただく。また、デジタル人文学の分野から、菊池信彦氏（国文学研究資料館）にご報告をいただく。

また、コメンテーターとして、五月女賢司氏にご登壇いただき、議論の射程を広げたい。

本シンポジウムを通じて、広い意味での関係者が出会い、他国の実例に学びながらより創造的な関係を構築し、次代の人文学・社会科学の発展を展望したい”。

From “A Shared Authority” to “A Shared AI-thority”: A Paradigm Shift for Oral and Public History?

Michael H. FRISCH
(Professor Emeritus, University at Buffalo)

ニコラス・ランブレクト先生に作成いただいたフリッシュ先生の講演要約
Summary of Michael Frisch’s lecture provided by Nicholas Lambrecht

According to Michael Frisch, both authoring and interviewing are “shared by definition”, resulting in a dialogic creation of meaning whenever living conversation takes place. It has now been over three decades since the publication of Frisch’s volume *A Shared Authority: Essays on the Craft and Meaning of Oral and Public History,* and prior to this symposium, it had been over twenty years since its author last discussed his ideas in Japan, but the implications of the concept of “shared authority” continue to be debated by scholars of public history around the globe. In this presentation, Frisch showed how new technological developments have both created new applications for the idea of “shared authority” and revealed hidden implications of the idea that were already immanent at the time of its creation.

To explore this topic, Frisch discussed how indexing and processing of oral histories and interviews has changed as a result of the incorporation of digital methods. On the one hand, he argued that community authoring has become more explicit over time, resulting in a new ability for us to understand oral history documents as “tiles of memory” that create a mosaic of history. This shift has incorporated communities into the composition and curation of public histories that were previously controlled by specialists and academics. On the other hand, Frisch showed that new software has allowed for the creation and maintenance of new types of databases, databases that do not consist solely of raw data or “cooked” analysis but rather allow their users to map, explore, and reference oral and public history materials in ways that shift between these two poles.

In particular, automatic transcription software has proven to be a powerful tool in the creation of flexible historical archives. While human intervention is needed to ensure that transcriptions of interviews are both accurate and browsable, AI transcriptions using new platforms like TheirStory have allowed Frisch and other researchers to produce and process transcripts with new levels of efficiency. This involves the creation of both “transcripts of record” that maintain the complete level of information contained in the original interviews, and the production of shorter “units” and “story digests” that highlight particular themes within recordings. Maintaining this kind of sortable spectrum of iterations allows practitioners of history to make their own editorial judgments in order to advance their research and teaching, tailoring the material used to particular audiences. This process also leaves the original archival material open for reuse in the form of a general, open-ended index. Frisch suggested that this is proof of the value of employing new technological approaches to oral and public history.

It remains difficult to predict what the field of oral history will look like in the future, particularly in light of ongoing developments in artificial intelligence that offer the potential for new ways of networking knowledge at the same time they present new “opportunities” to substitute AI analysis for thoughtful and attentive listening. However, Frisch reiterated that for the practice of history to be truly “shared”, it must incorporate active hearing and active dialogue. With this in mind, he argued that we must develop an “instrumental sensibility” that negotiates between archival and documentary modes, and perhaps between organic and artificial ones as well. This would allow practitioners to apply multi-dimensional indexing to multi-dimensional content, creating new possibilities for the application of “shared authority”.

ご講演をいただいた先生方より

福島幸宏
慶應義塾大学准教授

当日、筆者は第1部、第2部ともに司会をつとめた。その立場から、当日のパネルセッションの所感を短く述べる。パネルでは、菅豊からの「Shared Authorityは決して諦めてはいけないもの、手放してはいけないもの」という発言、菊池信彦からはデジタルヒューマニティーズにおける展開の紹介、石川良子からは、当事者たちから代弁者のAuthorityが与えられた研究者の逡巡と決意が語られた。それを受けて、五月女賢司からは、博物館のAuthorityをほしがる市民という提起があり、マイケル・フリッシュからは、データの爆発のなかでの対話という大きな課題が提出された。

ディスカッションでは、パブリックとの向き合い方がテーマとなった。議論を強引にまとめると、コンフリクトがあることを前提にし、個々ではなく集団としての研究者とパブリックという関係を構築し、社会と関わり続けること、となろうか。ともかくも、Shared Authorityを巡って、日本でこれほど深く議論が交わされたことははじめてであり、今後の展開に繋がる重要な機会となった。

牧田義也
一橋大学大学院社会学研究科専任講師

国際シンポジウム「Shared Authority: 歴史を描くのは誰か」では、アメリカ合衆国のパブリックヒストリー研究者マイケル・フリッシュ氏を招聘し、歴史叙述の主体をめぐる諸問題について議論が行われました。1990年に主著A Shared Authorityを出版して以来、フリッシュ氏はパブリックヒストリーやその関連分野で、さまざまな問題提起を続けてきました。今回のシンポジウムは、フリッシュ氏の多岐にわたる問題提起を、民俗学、デジタル人文学、オーラルヒストリー等、関連諸分野で研究をリードする研究者3名による研究報告とともに、日本国内の研究動向と結びつけながら検討する得難い機会となりました。

シンポジウムでは、「歴史を描くのは誰か」という問いをめぐってさまざまな意見が提出されました。歴史を描くことができるのは、学術的な訓練を受けた「専門家」だけなのでしょうか。この問いに対して、パブリックヒストリーという領域に関わる多くの者は、「専門家」だけではない、と答えるでしょう。歴史という言葉を使わずとも、人は誰しも過去を振り返り、過去から学ぶことで日常生活を営んでいます。その意味で、誰もが「歴史する」のであり、歴史とは「専門家」の専有物ではないのです。

このように、誰もが歴史を描き、語る主体になりえるという点では、大方の意見が一致しそうです。問題は、そうして描き、語られる歴史は、どんなものでも等しい価値をもつのか、という点です。

たとえば、大学等の研究者が厳密な史料分析に基づいて語る歴史と、町の老人が記憶を頼りに語る歴史は、等しく「正しい」と言えるのでしょうか。これは…評価の尺度を変えれば、どちらも「正しい」と言えるかもしれません。では、SNS等で散見される、根拠がだいぶ曖昧な歴史語りはどうでしょう。なかには、植民地主義等の過去の諸問題を矮小化するような主張も見受けられます。こうした極端な主張も、何らかの尺度に基づいて、歴史の語りとして認めるべきなのでしょうか。それとも、歴史の語りのなかには、「正しい語り」と「正しくない語り」が含まれるのでしょうか。しかし、もし歴史が「専門家」の専有物ではないとしたら、学術研究という枠組みの外側で、誰がどんな基準でその「正しさ」を判定できるのでしょう。

こうして「歴史を描くのは誰か」という問いを出発点として、歴史叙述の妥当性をめぐるさまざまな問題が浮かび上がってきます。そして、これらは歴史否定が横行する現代社会において、きわめて深刻な問題であると言えます。この困難な課題に対して、単一のわかりやすい解決策など見当たりません。だからこそ、本シンポジウムを起点として、今後さらなる議論の深化・発展が待たれるところです。

Column

Passing, Posing, Persuasion: Post-Publication Reflections

Christina YI (Associate Professor, University of British Columbia)
Andre HAAG (Associate Professor, University of Hawai'i at Mānoa)
Catherine RYU (Associate Professor, Michigan State University)

"How would one say 'to pass' in Japanese?"

It was the last day of the inaugural Zainichi Literature Workshop 2017, held that year at Lehigh University and co-organized by Nobuko Yamasaki, Christina Yi, and Catherine Ryu.[1] We had just concluded two stimulating days of presentations on Zainichi (lit. "residing in Japan"; resident) Korean cultural production, and were wrapping up the workshop with an open discussion on the shared themes and connections that had emerged among everyone's papers. It was Andre Haag who pointed out to us that passing—that is, the act of Koreans attempting to pass as Japanese—had come up again and again in the literary texts and films introduced at the workshop. Haag had earlier presented his research on the pioneering colonial-era Korean novelist Tei Zenkei (Chŏng Yŏn-kyu, 1899–1979) and his writings on the so-called 1923 "Korean hunts" (*Chōsengari*), in which as many as 6,000 Koreans (and some misidentified Japanese) were massacred by Japanese vigilantes in the wake of the Great Kantō Earthquake. Passing is particularly relevant when considering that tragedy, which was precipitated by mass paranoia about acts of terror and sabotage by concealed Korean malcontents. As Haag would later argue in an article published in 2019, "the difficulty of distinguishing between ethnic Korean and Japanese individuals in this time of crisis further contributed to the sense of menace underlying the Korean Hunts by directing anxious attention to the porousness of boundaries separating ruler and ruled." [2]

The porousness of racial and ethnic boundaries had indeed been everywhere in the papers presented at the Zainichi Literature Workshop, but none of us had thought to frame it in such a way until Haag suggested it. That passing was the "default condition"[3] of life for Zainichi Koreans was starkly clear, and yet we immediately ran into the problem of how to articulate the shared theoretical, narratological, or aesthetic dynamics of passing as Japanese *in* Japanese—that is, through the language and worldview offered by the Zainichi writers themselves. Responding to the question of how to say "to pass" in Japanese, Unoda Shōya made the astute observation that while it was easy enough to provide a direct translation (e.g. "*Nihonjin* to *shite tōru*"), the word that most often cropped up in Zainichi literature was not a verb but a noun: *tsūmei* (lit. "passing name"), referring to the still-common practice of adopting a Japanese-sounding alias in order to pass as Japanese. That it was not any perceived visible, biological markers of race but instead an invisible, linguistic marker of ethnic naming upon which passing pivoted for Zainichi Koreans was a phenomenon that profoundly interested all of us, and so in 2018 we followed up the workshop with a symposium at Michigan State University entitled "The Poetics of Passing: Interrogating Self-Fashioning as the Other in Zainichi Cultural Production" (co-organized by Catherine Ryu, Jonathan Glade, and Christina Yi); and, in 2019, an international conference at UBC entitled "Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Modern Japan" (co-organized by Christina Yi, Sharalyn Orbaugh, and Catherine Ryu).[4]

It is that last conference that became the seed for the edited volume *Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Japan's East Asian Empire*, which was co-edited by Christina Yi, Andre Haag, and Catherine Ryu and which came out through the University of Hawai'i Press at the end of 2023. One thing that had become apparent to us in the course of organizing and participating in these events was how discourses around passing by (post-)colonial subjects went hand in hand with both accusations of deception and acts of posing by their colonizers, and how none of this could be disentangled from the larger structures of imperial control. As one way of justifying the expansion of the Japanese empire, propagandists argued that the racial and cultural similarities between Japan and its neighbors would facilitate integration. As Japan's colonization attempts progressed, however, the discourse of racial/ethnic similarity was increasingly haunted by its own internal contradictions. In Korea, for example, Japanese officials used phrases such as *naisen ittai* (an abbreviation for "Japan and Korea as one body") to encourage integration even while enacting a series of discriminatory laws and ordinances designed to keep Koreans subordinated to mainland Japanese. Meanwhile, some colonial subjects vociferously insisted on equating imperial identity with civil equality. If "imperial subject" and "Japanese" were one and the same, the argument went, then Koreans and Taiwanese were entitled to the same rights as ethnic Japanese subjects in the metropole. In short, Japanese imperialists were threatened by the possibility of their own success.

As its blurb description indicates, *Passing, Posing, Persuasion* is a work that emphasizes the plurality and heterogeneity of empire, together with the contradictions and tensions of its ideologies of race, nation, and ethnicity.[5] The paradoxes of passing, posing, and persuasion opened up unique opportunities for colonial contestation and negotiation in the arenas of cultural production, including theater, fiction, film, magazines, and other media of entertainment and propaganda consumed by audiences in mainland Japan and its colonies. From Meiji adaptations of Shakespeare and interwar mass media and colonial fiction to wartime propaganda films, competing narratives sought to shape how ambiguous identities were performed and read. All empires necessarily engender multiple kinds of border crossings and transgressions; in the case of Japan, the policing and blurring of boundaries often pivoted on the rather changeable outer markers of ethno-national identification such as language, clothing, habitus, and especially names. Our book showcases how actors—in multiple senses of the word—from all parts of the empire were able to move in and out of different performative identities, thus troubling that empire's ontological boundaries. As we write in the introduction of the volume:

> It may be argued that passing, posing, and persuasion are above all else about representation, and that cultural production is the site where the practices and politics of that representation are most forcibly encountered, engaged, and exposed. Taken together, the essays in *Passing, Posing, Persuasion* reiterate the importance of analyzing the global configurations of race and ethnicity at play in East Asian cultural production. At the same time, they are also attentive to the specificities of people's experience of empire, and the various rhetorical strategies, historical circumstances, and material capital that cultural producers drew upon in responding to the exigencies of empire.[6]

In July 2024, the editors were invited to Osaka University by Unoda Shōya and other members of the Global Japanese Studies Research and Education Incubator to speak about *Passing, Posing, Persuasion*. It was a wonderful opportunity to reflect back on the long journey that led us to the project, especially considering that Unoda had been a key participant in the inaugural Zainichi Literature Workshop and subsequent meetings, and had first pointed us in the direction of the *tsūmei*. One question we were asked during the Q&A was about the title, and more specifically the designation of "Japan's East Asian Empire." Although by 1945 the Japanese empire spanned a wide swath of territory in the Pacific, including Southeast Asia and the South Seas, due to practical limitations of time and space we decided to keep our scope to East Asia given the shared structural features found in Japan's colonies there. However, we recognize that the dynamics of passing, posing, and persuasion discussed in our volume depended upon a discourse of racial similarity and assimilation that proved untenable in places such as South Seas or with the Indigenous populations in Taiwan (as astutely suggested by the chapter contributions from Robert Tierney and Joan Ericson).[7] We hope in future projects to explore in more depth the question of how to approach the problematics of *not passing* (the conditions and consequences of being unable or unwilling to cross perceived social boundaries), as well as what Kimberly Kono calls "the *accusation* of passing."[8] We also wish one day to follow up on the conclusions made by Nobuko Yamasaki and Faye Yuan Kleeman about the various kinds of suasion campaigns that acknowledged difference as an inextricable part of any empire.

Another area for further scholarship lies in our postcolonial present, and the ways that the legacies of the Japanese empire continue to constitute ethnoracial boundaries today. The volume's last chapter contribution by Kang Yuni addresses this issue by considering the lasting effects of Japan's infamous *sōshi kaimei* (lit. "establishing family names and changing given names") policy in colonial Korea through the lenses of gender and ethnonational subjectivity, through an extended discussion of Zainichi Korean writer Yū Miri's magnus

opus *Hachigatsu no hate* (The End of August, 2004). We do believe that there remains much more to be said on the subject of passing as the "default condition" for Zainichi Koreans and other ethnic minorities in Japan. Inspired by the chapter by Nayoung Aimee Kwon, who provides a comparative reading of the writings of Kim Saryang and Langston Hughes in order to forge transpacific Afro-Asian solidarities, we think it would also be fruitful to seek out more connections with other literary canons. Overall, we hope that our volume can help spark such conversations in the future and contribute to ongoing research on empire studies and the workings of Japanese(-language) cultural production.

Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Japan's East Asian Empire

Table of Contents

1. **Introduction: Passing, Posing, and Persuasion in the Japanese Empire**
   Christina Yi, Andre Haag, and Catherine Ryu
2. **A Japanese Othello in Taiwan: Performing Patriarchy, Race, and Empire in Imperial Japan**
   Robert Tierney
3. **Passing and Posing in Colonial Manchuria in Murō Saisei's *Koto of the Continent***
   Kimberly Kono
4. **Passing, Paranoia, and the Korean Problem: Cultures of "Telling the Difference" in Imperial Japan**
   Andre Haag
5. **Pluralizing Passing and Transpacific Afro-Asian Solidarities: Passings and Impasses across Colonial Korea and the Segregated United States**
   Nayoung Aimee Kwon
6. **Crafting the Colonial "Japanese Child"**
   Joan E. Ericson
7. **A Woman for Every Tribe: Li Xianglan and Her Construction of a Pan-Asian Femininity**
   Faye Yuan Kleeman
8. **Ri Kōran: Posing and Passing as a "Cultured Native"**
   Nobuko Yamasaki
9. **In the Shadow of *Sōshi Kaimei*: Imposed and Adopted Names in Yū Miri's *The End of August***
   Kang Yuni and Cindi Textor

Notes

1 The website for the workshop can be accessed as follows: https://3pconferenceubc2019.wixsite.com/2017

2 Andre Haag, "The Passing Perils of Korean Hunting: Zainichi Literature Remembers the Kantō Earthquake Korean Massacres," *Azalea: Journal of Korean Literature & Culture* 12 (2019): 266.

3 John Lie, *Zainichi (Koreans in Japan)* (University of California Press, 2008), 20.

4 The MSU symposium website can be found at https://3pconferenceubc2019.wixsite.com/symposium and the UBC conference website at https://3pconferenceubc2019.wixsite.com/march. The MSU symposium resulted in a special issue on the poetics of passing in Zainichi cultural production coedited by Christina Yi and Jonathan Glade and published in *Azalea: Journal of Korean Literature and Culture* 12 (2019).

5 https://uhpress.hawaii.edu/title/passing-posing-persuasion-cultural-production-and-coloniality-in-japans-east-asian-empire/

6 *Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Japan's East Asian Empire*. Christina Yi, Andre Haag, and Catherine Ryu, eds. (University of Hawai'i Press, 2023), 15.

7 Kirsten Ziomek provides illuminating examples of when ethnoracial difference, rather than similarity, were emphasized by Japanese imperialists in her monograph *Lost Histories: Recovering the Lives of Japan's Colonial Peoples* (Harvard University Asia Center, 2019).

8 Kimberly Kono, "Passing and Posing in Colonial Manchuria in Murō Saisei's *Koto of the Continent*," in *Passing, Posing, Persuasion*, 43.

Column

Personal Experience as Method in Japanese Studies

Matías CHIAPPE IPPOLITO
(Professor, El Colegio de México, Center for Asian and African Studies)

During my undergraduate program in Literary Studies at the University of Buenos Aires, I was deeply fascinated by Latin American authors who expressed an interest in Japanese culture. This group included figures from the early 20th century *Modernismo* movement, such as José Juan Tablada and Enrique Gómez Carrillo, celebrated postwar writers like Jorge Luis Borges, and also contemporary journalists who had traveled to Japan for various reasons, such as Araceli Tinajero and Julián Varsavsky. The motivation behind my desire to learn more about these authors stemmed from a personal connection; like them, I had also been profoundly attracted to Japan, and I sought to understand, in scholarly terms, the reasons behind Latin America's growing interest in Japanese culture. Throughout those transformative years, I delved into the texts and works of these writers, immersing myself in their perspectives and insights. However, I eventually came to realize that the findings of my research paled in comparison to the deeper, more profound motivation that had ignited my inquiry in the first place: my personal experience as a Latin American interested in Japanese culture.

During my Master's program in Japanese Studies at El Colegio de México, I developed a keen interest in the cultural exchange flows of Japanese culture during the 20th Century. As an Argentinian *ryūgakusei* living in Mexico, I was eager to explore the channels that had facilitated deep intercultural connections and two-way flows between Japan and Latin America. Among many examples, I found that Haroldo de Campos, a Brazilian poet highly influenced by Japanese haiku, not only shaped literary movements in Brazil but also helped establish poetry circles in Japan together with Yoshimasu Gōzō. Similarly, Gabriel García Márquez famously penned a short-story version of Kawabata's *Nemureru bijo*, but his translations were also highly influential to authors such as Nakagami Kenji and Hiromi Kawakami. This prompted me to consider unexpected pathways through which Japanese culture flourished in Latin America and vice versa. My personal experience resonated with this exchange again: I had never anticipated that a Mexican university would serve as bridge connecting my Argentinian roots and my passion for Japan. Yet, in that unexpected environment, I recognized a valuable opportunity to explore the dynamics of cultural exchange and its implications on our understanding of global literary movements.

During my Doctoral Program in Intercultural Studies at Waseda University, I conducted an in-depth analysis of the reception of Latin American culture among Japanese writers. This research represented a methodological inversion of my undergraduate studies, as I was now prepared to engage directly with untranslated Japanese sources. Notable writers such as Shimazaki Tōson, Yukio Mishima, Ōe Kenzaburō, and Banana Yoshimoto had traveled to Latin America, drawing significant inspiration from the region's art, literature, and history. Through my analysis, I identified several distinct images that these authors and others had formulated about Latin America, which I classified into three categories: the primitive image, the primeval image, and the peripheral image. These observations emerged during the first of my seven years of living in Japan, a period during which I became increasingly fascinated by the cultural aspects and social nuances of my home region that captured the interest and curiosity of the Japanese people with whom I was interacting. In essence, examining Japanese writers' perceptions of Latin America mirrored my personal experience in Japan, particularly when locals inquired about my customs, thereby highlighting in literature the dynamics of everyday interculturality that shape our mutual understanding.

Deliberately or inadvertently, my personal experiences have been a powerful motivation for my research throughout my career. Does this mean that I am a self-centered researcher? I apologize if I can't fully pin down a negative answer, but this question actually opens a vital conversation about the role of personal experience in scholarly work. After all, isn't every scholar

a little bit self-referential? We can't help but view the world through our unique lenses shaped by our backgrounds, beliefs, and experiences. Isn't it ironic that while we strive for objectivity, our very existence introduces a layer of subjectivity into our research?

Perhaps a more constructive way to phrase the above inquiry would be: "How self-aware am I as a researcher?" The issue extends beyond showcasing one's personal narrative; it involves a critical understanding of how one's positionality informs and influences the insights derived from research. By reflecting on how our individual stories intersect with our research questions, we can develop more nuanced perspectives that not only enrich our findings but also challenge conventional interpretations and assumptions. In turn, this approach not only broadens the scope of inquiry but also invites more meaningful and multifaceted conversations within academia.

Why is this relevant for non-Japanese students in Japanese Studies? First, because the field inherently involves navigating the complex interplay between the self and the "Other". Personal experiences as a foreigner offer a unique perspective on Japan, revealing how our cultural backgrounds and biases shape the way we engage with the subject. This self-awareness leads to more critical and thoughtful research, allowing scholars to challenge stereotypes, romanticized views, and exoticized portrayals of Japan. Second, personal experience enables researchers to question and deconstruct preconceived images, fostering more authentic, nuanced, and multidimensional representations of Japanese culture. There is always something new to be discovered in Japanese culture, and some of that can be directly linked to you! Third, Japanese Studies thrives when scholars embrace their positionality, acknowledging how their distinct perspectives, whether shaped by nationality, language, or lived experience, can unearth insights that would otherwise remain hidden. By incorporating these personal narratives, we enrich academic inquiry, demonstrating that the rigorous pursuit of knowledge can coexist with, and even benefit from, the depth of lived experience.

Nevertheless, academia has negative assumptions about mixing personal experience in scholarly research. We have all heard them before: objectivity is believed to be superior to subjectivity, personal experience is anecdotal, personal narratives can only be used in the humanities or qualitative methods. These assumptions often stem from a rigid understanding of what constitutes "valid" knowledge, privileging detached and impersonal methodologies over approaches. Still, many researchers promote the use of personal experience at least at some stage of scholarly research, challenging the false dichotomy between objectivity and subjectivity. Marjorie Steward, for instance, in her essay "Weaving Personal Experience into Academic Writing" (2020), has shown that personal story can work as frame, context, example, and discovery in academic writing. This perspective opens the door for researchers to use their lived experiences as a lens through which to interpret data or construct arguments, enriching their work with unique insights that might not emerge through traditional methodologies alone. Moreover, integrating personal narratives can help bridge the gap between academia and wider audiences, making research more relatable and accessible without sacrificing intellectual rigor.

Aside from the applications in academic writing, I would like to highlight that personal experience can help us achieve the so elusive originality that all researchers covet. Originality, after all, is not just about presenting something entirely new but about offering a fresh perspective that enhances our understanding of a topic. Personal experience is a powerful tool for this because it provides a lens shaped by unique cultural, social, and intellectual influences. This approach is particularly valuable in Japanese Studies, a field that often grapples with deeply entrenched stereotypes and one-dimensional portrayals. Did you know, for instance, that both Mishima Yukio and Ōe Kenzaburō were attracted to Latin America because many intellectuals of the region were, just like them, anti-Americans? Did you also know that anti-Americanism and anti-imperialism convoked many other Japanese writers, such as Hotta Yoshie or Tomiyama Taeko, taking them to Brazil, Haiti, and Cuba? As a Latin American familiar with the study of the history of the region, I felt I could contribute something meaningful to the field of Japanese Studies by exploring and inscribing these overlooked transnational connections into academic discourse, informed by my own personal experiences and cultural background.

Personal experience is also a powerful tool against Artificial Intelligence. It humanizes research by adding emotional depth and context that AI can hardly replicate. It challenges the limitations of algorithmic interpretations, enriching conclusions with nuanced, human perspectives and promoting diversity in discourse. Specifically, in regard to Japanese Studies, personal experience offers a critical advantage over AI by addressing cultural and contextual subtleties that algorithms often miss. If I may use my personal experience as an example again, while AI can mention some well-known examples of the connections between Japan and Latin America, it can hardly explain the emotional resonance these intellectual exchanges held for both sides. This includes the aforementioned deep anti-imperialist sentiments shared by Latin American writers and Japanese intellectuals during the Cold War, but also the reinterpretations and parodies of such feelings in the works of writers like Shimada Masahiko and Hoshino Tomoyuki. The deeply personal ways in which writers from Japan and Latin America interpreted each other's cultures necessitate an equally empathetic research perspective capable of exploring these cross-cultural literary and historical subtleties. What can AI say about that? Probably, it will make something up—at least until your paper gets published, and the algorithm uses it as a source.

One final compelling reason to advocate for the inclusion of personal experience in academic research is its capacity to transform lived experiences into theoretical concepts. The ability to translate personal experience into intellectual inquiry enriches both the research process and its outcomes, grounding them in authenticity and passion. For me, this process was essential, as my experiences in Latin America and Japan became the foundation and inspiration for my scholarship. As an undergraduate, I sought to understand why Latin American writers were drawn to Japan, a curiosity born from my own personal connection to the subject. During my Master's program, I focused on exploring intercultural exchanges between Latin America and Japan, influenced by my own environment at the time. My PhD research deepened this exploration, analyzing Japanese writers' perceptions of Latin America, recognizing that I had become part of this dynamic while living in Japan. This intellectual pursuit, however, extended beyond my personal experiences; it pointed to a broader cultural and intellectual phenomenon that required deeper investigation. The reception of Japanese culture in Latin America, its global impact, and Japanese perceptions of Latin Americans are not mere personal matters but part of a larger discourse, in which my experiences serve as a starting point for further academic exploration.

All things considered, can personal experience be regarded as a methodology? At present, I would categorize the use of personal experience in Japanese Studies as a mere "method"; that is, as a tool rather than a fully developed theoretical framework. However, I argue that personal experience is indispensable for a comprehensive understanding and interpretation of complex intercultural phenomena. Methodologies in the humanities are not confined to rigid frameworks; rather, they evolve and adapt to the unique challenges presented by each research context. In Japanese Studies, particularly in the examination of cross-cultural exchanges, personal experience provides a profound means of linking theoretical frameworks to lived realities. When we analyze cultural interactions between Japan and Latin America, for instance, the human element—those who lived, traveled, and created within these environments—cannot be overlooked. As a researcher, my position within these global exchanges, grounded in both my Latin American background and my time in Japan, enabled me to approach the subject matter with personal engagement and intellectual curiosity, thereby demonstrating that personal experience can indeed serve as a valuable methodological tool.

What about you? Can you leverage your personal experience in your scholarly research? My final argument is this: if you can, you are already halfway to achieving meaningful academic success.

月例ワークショップ

日本研究の最先端の成果を学際的に共有することと、研究ネットワークを国際的に拡大することを目的として、会場でもオンラインでも参加できるハイブリッド形式のGlobal Japanese Studies Research Workshopを、2024年1月から12月にかけて6回開催しました。そこでは、アメリカ、カナダ、メキシコやトルコなどの大学で活躍している研究者を迎えるとともに、学内の教員にもご登壇いただきました。さらに3月には、大阪大学の優れた大学院生の研究発表会を英語で開催しました。

7月には、ブリティッシュ・コロンビア大学のChristina Yi先生とハワイ大学のAndre Haag先生を迎え、両先生が刊行に携わった*Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Japan's East Asian Empire*（University of Hawai'i Press, 2023）の背景、意図、成果などについて語っていただきました。これに際して、本拠点とブリティッシュ・コロンビア大学やハワイ大学との連携を進めていくための今後の方針について話し合うなど、交流を深めました。さらに12月には、メキシコ大学院大学のMatias Ariel Chiappe Ippolito先生にご登壇いただき、同大学の大学院生との研究交流ワークショップを開きました。そのうえで、メキシコ大学院大学と本拠点との今後の連携強化に向けた具体的な取り組みについて相談することができました。

また、本拠点が日本研究の取り組みを学内から公募し、支援している拠点形成プロジェクトの途中経過や最終成果の発表の場を月例ワークショップの一つとして位置づけ、拠点形成プロジェクト主催によるシンポジウムとワークショップを4回開催しました。

GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム

京都学派およびポスト京都学派と科学哲学・技術哲学の現在

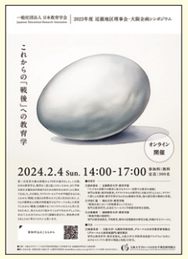
日　時　2024年1月28日［日］13：00–17：00
会　場　大阪大学豊中キャンパス基礎工学国際棟1階 セミナー室
＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　71名（オンライン52名／対面19名）
登壇者　プロジェクト紹介　山崎吾郎（大阪大学）
「西田哲学とポストモダン」眞田航（大阪大学）
「ハイデガーから三木清の技術論を読む
――現代技術哲学への寄与に向けて」岡田悠汰（京都大学）
「三木清における西田の絶対無の解釈と『構想力の論理』
――集合表象論から史的唯物論の批判的再構成へ」近藤和敬（大阪大学）
総合討議 近藤・岡田・眞田・山崎・檜垣 立哉（専修大学）・織田和明（大阪大学）

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学研究」
共催：大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター IMPACTオープンプロジェクト 哲学の実験オープンラボ

GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム

これからの「戦後」への教育学

日　時　2024年2月4日［日］14：00–17：00
会　場　オンライン開催
参加者　43名
登壇者　「フィジカル空間での戦争に抗するサイバー空間での
教育の挑戦」
黒田恭史（京都教育大学教育学部）
「戦後広島において非被爆者として生きる」
平田仁胤（岡山大学教育学域）
「戦後沖縄の複数性」古波蔵香（福岡教育大学教育学部）
司会　岡部美香（大阪大学大学院人間科学研究科）



主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「社学連携型・高度副プログラム「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」の開発」
日本教育学会 近畿地区理事会（大阪企画）

GJS Research Workshop 2024年3月例会

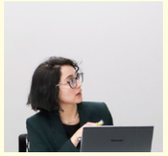
大学院生研究発表会
Selected Graduate Explorations of Global Japanese Studies

日　時　2024年3月8日［金］15：00–17：00
会　場　大阪大学豊中キャンパス
大阪大学会館2階セミナー室1
参加者　9名
発表者　Fernanda Balzacchi de MOURA
（人文学研究科博士前期課程日本学専攻）
"Symbols of Danger: The Brazilian 'Juvenile Delinquency Phenomenon' in Japan Through the Lens of the Community Newspaper *International Press*"

KOO Bon Woo
（文学研究科博士後期課程文化表現論専攻）
"*Chima-chogori* Motifs in Posters and the Identity of Korean Residents in Japan"

HU Jiazheng
（人文学研究科博士前期課程日本学専攻）
"The Post-Feminist Narrator in Shion Miura's *Four Women Who Live in That House*"

コメント
宇野田尚哉（大阪大学大学院人文学研究科教授）
Yulia BURENINA（大阪大学グローバル日本学教育研究拠点特任講師）
Nicholas LAMBRECHT（大阪大学大学院人文学研究科助教）



GJS Research Workshop 2024年4月例会　Book Talk Series

Green with Milk and Sugar: When Japan Filled America's Tea Cups
海を越えたジャパン・ティー：緑茶の日米交易史と茶商人たち

日　時　2024年4月22日［月］17：00–18：30
会　場　大阪大学豊中キャンパス
全学教育推進機構実験棟1Fサイエンス・コモンズ
DAICEL Studio＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　29名
ブック・トーク
Robert HELLYER（ウェイク・フォレスト大学教授）
コメント
杉山伸也（慶應義塾大学名誉教授）

GJS Research Workshop 2024年5月例会

ラテンアメリカにおける「帝国日本」の再考：
ブラジル・アマゾンにおける移植民事業の展開から

日　時　2024年5月27日［月］17：00–18：30
会　場　大阪大学豊中キャンパス
全学教育推進機構実験棟1Fサイエンス・コモンズ
DAICEL Studio＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　20名
講演者
Facundo GARASINO
（大阪大学グローバル日本学教育研究拠点特任講師）
コメント
秋山かおり（大阪大学大学院人文学研究科助教）

GJS Research Workshop 2024年7月例会　Book Talk Series

Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Japan's East Asian Empire

日　時　2024年7月8日［月］17：00–18：30
会　場　大阪大学豊中キャンパス
全学教育推進機構実験棟1Fサイエンス・コモンズ
DAICEL Studio＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　19名

ブック・トーク
Christina YI（ブリティッシュ・コロンビア大学准教授）
Andre HAAG（ハワイ大学助教授）

GJS Research Workshop 2024年7月例会（2）

明治百年祭の表象の分析と課題：過去15年の調査から

日　時　2024年7月26日［金］17：00–18：30
会　場　大阪大学豊中キャンパス
全学教育推進機構実験棟1Fサイエンス・コモンズ
DAICEL Studio＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　16名

講演
Hasan TOPACOGLU
（国際日本文化研究センター外国人研究員／ユスキュダル大学助教授）

コメント
楠綾子（国際日本文化研究センター教授）
平尾漱太（大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程日本学専攻）

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
共催：大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻現代日本学講座

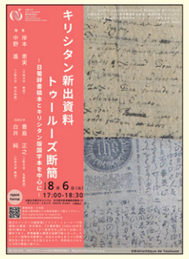
GJS-ERI拠点形成プロジェクトワークショップ

キリシタン新出資料・トゥールーズ断簡
――日葡辞書稿本とキリシタン版国字本を中心に

日　時　2024年8月6日［火］17：00–18：30
会　場　大阪大学豊中キャンパス
全学教育推進機構実験棟1Fサイエンス・コモンズ
DAICEL Studio＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　134名

報告
岸本恵実（大阪大学教授）
中野 遙（上智大学特任助教）

コメント
豊島正之（上智大学名誉教授）
白井 純（広島大学教授）



主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト
「キリシタン新出資料・トゥールーズ断簡：日葡辞書稿本とキリシタン版国字本を中心に」

GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム

ポスト体験時代の記憶の継承
――アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ

日　時　2024年10月26日［土］13：00–16：30
会　場　オンライン開催
参加者　100名

沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」にて（2024年10月）

沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」にて（2024年10月）

プログラム

13:00–13:10　**趣旨説明**
三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

13:10–14:30
第1部〈話題提供〉
コザの戦後史の継承が拓いていく未来への展望

モデレーター：吉成哲平（大阪大学大学院人間科学研究科DC）

それぞれの土地の歴史を背負う現在から浮かび上がる東アジアとの結びつき
「記憶の継承の現場で展開される「戦後」を生きる人びとの複雑な経験」
「記憶の継承ラボ」の院生メンバー

現場からのレスポンス「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」
「沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」の取り組み」
恩河尚（沖縄市史編集担当）、伊敷勝美（沖縄市史編集担当）

14:30–14:40　**休憩**

14:40–16:00
第2部〈基調報告〉
戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の思想的営為

司会：三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科）

14:40–15:10
生活の中で生まれゆく写真表現から「戦後」を捉え直す
「写真家たちが向き合った1970年前後の現実
――「写真100年」の歴史から内省した現場での撮影表現の意味」
吉成哲平（大阪大学大学院人間科学研究科DC）

15:10–15:40
国境移動の経験を通じて心身で受けとめていった重層的な歴史
「日中「二つの東北」の痛みと向き合いながら暮らす結婚移民の中国人女性たち
――「単位制」の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ結び目となりゆく歴史実践」
王石諾（大阪大学大学院人間科学研究科DC）

15:40–16:00
ディスカッサント：小林清治（大阪大学大学院人間科学研究科）

16:00–16:30
第3部〈総合討論〉
アジア地域史から共に考える私たちの暮らし

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「21世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築」
大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACTオープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」（記憶の継承ラボ）

共催：沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」
大阪大学中国文化フォーラム

GJS Research Workshop 2024年12月例会

Perspectives on Japanese Studies from Latin America

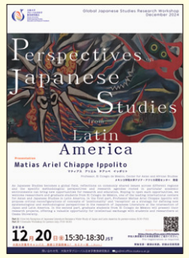
日　時　2024年12月20日［金］15：30–18：30
会　場　大阪大学豊中キャンパス
　　基礎工学国際棟1Fセミナー室
　　＋Zoom（ハイブリッド開催）
参加者　24名

プログラム

15:30–17:00
Part 1
How My Reception of Japanese Literature Became a Wider Study of Japan and Latin America (In person+online)

Matias Ariel Chiappe Ippolito（メキシコ大学院大学教授）

17:00–18:30
Part 2
Graduate Workshop (In-person only)



GJS Research Workshop 2024年4月例会

講演を終えて

Amin GHADIMI（人文学研究科言語文化学専攻准教授）

Who'da thunk (to put the question in the correct register) that once upon a time, with that "time" being just about a century ago, the color of the familiar liquid filling the teacups of ordinary Americans was green, not black—that green tea, not black tea, was America's tea?

Professor Robert Hellyer thunk it, and he came to Handai to share with us his ingenious research. What happened? he asked. How was it possible that green tea went from being a familiar product to an exotic, "Asian" one—and how is it possible, more generally, that something quotidian becomes exoticized, not the other way around?

To demystify the story, Professor Hellyer took us through sources and archives spanning thousands of miles and over a century of time. As he coursed through "teaways" over the Pacific, he encountered problems of domesticity, of gender, of race, of war, and of virtually all the most pressing cultural questions of the human past. And, as it turns out, he found with the teaways his own family past, his own ancestors from the United States who came to our country to develop our tea industry and to send tea back home.

To this cultural lunge into the history of tea, Professor S. Sugiyama, standing on rigorous economic and financial ground, riposted, offering a rebuttal that was less rebuttal than a work of original research in its own right. As he laid out empirical data to try to undermine the narrative that Professor Hellyer's teaways built, what arose was a conversation not just between two scholars but between two paradigms: between a mode of history-writing that sees reality as a composite of cultural and discursive constructions and another that takes as historical fact statistical records and numerical reality. We who witnessed the exchange were granted a world in a teacup: a world of history and a world of historiography, a world not visible without this meeting of prodigious minds.

We thank Professors Hellyer and Sugiyama for their sterling research and for sharing that research with us at Handai.

Graduate Conference

第6回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies

日本研究に従事する大学院生の国際発信力の強化と分野横断的な研究交流を目的として、2024年1月6日（土）に、第6回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies を「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で開催しました。主催組織以外からは、講師としてクリスティーナ・岩田＝ワイケナント先生（名古屋大学教授）、フェリッペ・モッタ先生（京都外国語大学講師）が参加してくださり、9人の大学院生が研究発表を行いました。

日時：2024年1月6日［土］
会場：大阪大学中之島センターセミナー室
共催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
「国際日本研究」コンソーシアム

Time	Speaker
9:00–9:10	Opening Remarks (UNODA Shōya and Nicholas LAMBRECHT, Osaka University)
9:10–9:20	Introductions of Panelists and Commentators
9:20–11:05	PANEL #1
9:20	Feminist Foreign Policy: A Concept for Japan? (Annika CLASEN, German Institute for Japanese Studies)
9:55	Corporate Responses to Social Issues: The Case of a Japanese Logistics Company (Ali KRUBALLY, Osaka University)
10:30	Japan's Relationship to Russia and International Sanctions: A Change of Tide? (Katharina DRESSEN, Heinrich Heine University Düsseldorf / Hosei University)
11:05–12:05	Lunch Break
12:05–13:50	PANEL #2
12:15	Revisiting Lu Xun and Japanese *Sōsaku-hanga*: Insights from "To Printmakers" and "How to Create *Sōsaku-hanga*" (ZHANG Jingyi, The Graduate University for Advanced Studies)
12:40	Transnational Synchronization: A Transwar History of Nakanishi Tsutomu's Views on the Politics of China and Japan (LI Jiadi, Osaka University)
13:15	Anonymous Amanuenses: Multilingualism and Knowledge Transfer in a Recently Discovered Christian Manuscript (Sophie TAKAHASHI, Ruhr University Bochum / German Institute for Japanese Studies)
13:50–14:05	Short Break
14:05–15:50	PANEL #3
14:05	From the Stage to the Screen: The Intertwining of Kogō and Kenreimon'in from the 14th to the 17th Century (Alessandra SOLIMENE, Sophia University)
15:15	Historicizing *Otaku* Subjectivity: A Critical Analysis of the Desire for the "Phallic Girl" (KYAKUMOTO Atsunari, Osaka University)
15:50–16:05	Short Break
16:05–16:55	General Discussion (Kristina IWATA-WEICKGENANNT, Nagoya University; Felipe MOTTA, Kyoto University of Foreign Studies; and the conference organizers)

パンフレット

発表者の声

日本を対象とした研究を行う際、日本語のみ使用しても良いかもしれませんが、研究の成果をより多くの人に知ってもらうためには、やはり英語で発表しなければならないと思い、Osaka Graduate Conference in Japanese Studies に申し込みました。そして実際に参加すると、この Graduate Conference では、英語による研究発表に関するさまざまなことを教わったように感じます。コメンテーターの先生方は、発表内容についての英語圏の聴衆に向けての発表において説明・留意すべき点だけでなく、スライドのデザインや発表時のたち振る舞いについても教えてくださいました。また、学会は他の研究者の発表を聞き、意見交換する社交の場でもありますが、この Conference でもそのような機会に恵まれました。端的に言えば、Osaka Graduate Conference in Japanese Studies に参加すれば英語圏の学会発表のイメージがつき、本番のための練習として最適だと思います。

オブザーバーの声

拠点が開催する Osaka Graduate Conference in Japanese Studies に参加して、何よりも、良い発表の仕方について学ぶことができました。それは、発表のテクニックだけではなく、幅広い専門を持つ視聴者のためにそれぞれの研究をどのように発表できるのかが議論され、グローバル日本学というエリア・スタディーズにおいて欠かせないスキルだと思い知らされました。先生方による指摘やコメントがとても刺激的で、専門ではない分野に関してどのように質問をすれば良いのか、またはどのような質問があり得るのかについて学ぶ機会にもなり、将来自分が教員になったときにとても参考になります。さらに、発表者のプレゼンテーションを見ることによって、なかなか触れる機会がない分野に関して繰り広げられている研究について少しでも知ることができて、大変有意義な時間を過ごせました。

Osaka University
Global Japanese Studies
Education and Research Incubator

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies

今年の活動を振り返って

本拠点の運営委員の方々に、今年の活動について振り返っていただきました。

宇野田 尚哉（副拠点長／グローバル拠点形成部門長／デジタル日本学部門長／人文学研究科教授）

本拠点は、2020年12月、COVID-19パンデミックの最中に発足し、日本学を拠点とした海外ネットワークの形成が思うように進められない状況が続いていました。しかし、今年度はこの事業に注力し、海外の大学との学術協定を締結することができました。

ブリティッシュコロンビア大学アジア学科ならびにハイデルベルク大学哲学部東アジア学センターの関係者の皆様には、改めて心より感謝申し上げます。

新年度は、さらに地域との連携を強化し、人文社会科学分野における高大連携事業を推進してまいります。今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

岩井茂樹（副拠点長／グローバル人材育成部門長／ネットワーク形成管理部門長／日本語日本文化教育センター教授）

本拠点では、グローバル人材育成のため、Japanese Studiesを基盤とした学際的・社学連携的教育プログラムの構築遅延とその全学展開を図っており、「大学院高度副プログラム」として、既存の「グローバル・ジャパン・スタディーズ」（人文学研究科主管）と「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」（人間科学研究科主管）に加え、昨年度より「デジタルヒューマニティーズ」（人文学研究科主管）の提供が始まり、これらも安定的に運用されるようになってきたことから、本拠点の教育的な機能強化が順調に進んできたと言えると思います。また、個人的なことではありますが、本年度から副拠点長の職を拝命いたしました。まだまだ理解不足の点もあり、現時点ではなかなかお力にはなれていない状況ですが、これからグローバル日本学教育研究拠点の更なる発展のために、尽力していく所存ですので、グローバル日本学教育研究拠点が今後どのように変わっていくのかを含め、ご期待いただけるとありがたく存じます。

小野博司（グローバル拠点形成部門／高等司法研究科教授）

私は本年度大阪大学に参りましたので、最初は、本拠点の活動については何も知りませんでした。ですが、私の専攻は日本法制史で、以前より海外の日本（法）研究に関心を持っておりましたので、運営委員として本拠点に関わる中で、「国際日本学」の現状と課題、そして可能性について学ぶことができました。また、拠点形成プロジェクトに応募し、現在、学内外のメンバーと協力して、「明治期における伝統日本法紹介の試み――日独法学者による『令義解』独訳計画」というテーマで研究を行っています。成果を出せるのは来年度以降になると思いますが、ドイツを中心に、ヨーロッパにおける日本法研究の歩みを明らかにする、おもしろい研究が出来るのではないかと考えています。

鳩澤（ばんざわ） 歩（グローバル拠点形成部門／経済学研究科教授）

2024年をふりかえって、本拠点の運営委員としての活動については申し上げられることが甚だ薄いのが恐縮ですが、経済学研究科の経済史・経営史教員としては本年度から先導的学際研究機構（OTRI）のグローバルヒストリー部門の活動に本格的に参加し、定期的なグローバルヒストリー・セミナーなどで主幹的な役割を担う同僚教員のサポートにあたっています。外国史以上に、日本史をグローバルな視野でとらえることは常態化しているようです。身近なところでいえば、当然のようにドメスティックなものであった日本鉄道史研究は、すでに「日本帝国」（植民地を含むかつての日本帝国圏）の鉄道史研究として展開しています。このように本質的にグローバルなものである（べき）点で、歴史研究、さらに経済学研究も日本学・日本研究と通じますので、GH部門の活動などを本拠点との活動につなげる可能性を考えていきたいと思っております。

渡邊英理（グローバル拠点形成部門／人文学研究科教授）

韓国の作家ハン・ガン氏がノーベル文学賞を受賞しました。受賞の報に際し、共同通信の取材を受け、「アジア文学」の専門家としてコメントしました。「繊細で壊れやすい記憶を書くのにどのような言葉を使うべきか、徹底的に向き合った。つらい記憶に拮抗し得る表現を「発明」した作家だ」。

今春に邦訳された『別れを告げない』で、ハン・ガンは、済州島での民衆蜂起を弾圧し、島民を虐殺した1948年の「4・3事件」を描いています。この作品には、「過去を死なせないという意志、祈りのようなものが込められている」、そして、それが生の肯定と未来の創造につながるという確信が、この小説を柱として支えています。在日朝鮮人作家の金石範氏、金時鐘氏もまた、この大虐殺の記憶と向き合うことをライフワークとしてきました。戦争と暴力が未だなくならない世界で、ハン・ガン、そして、金石範、金時鐘らの作品が広く読まれることを願っています。

南 和志（グローバル拠点形成部門／国際公共政策研究科准教授）

グローバル日本学教育研究拠点の運営委員は2年目となります。世界中で人文学のプログラムが縮小される中、グローバル日本学は日本と世界の人文学をつなぐ架け橋になる可能性を秘めており、これからも微力ながら貢献できればと思っております。私は東アジアの国際関係史が専門で、今年3月には『People's Diplomacy: How Americans and Chinese Transformed US-China Relations during the Cold War』と題した単著をコーネル大学出版会から出版しました。今後は日本に関する研究にも着手していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

Nicholas LAMBRECHT（グローバル拠点形成部門／人文学研究科准教授）

2024年には、国際シンポジウムや月例ワークショップなど、グローバル日本学教育研究拠点主催・共催する多くのイベントに参加し、拠点の意義を改めて再確認しました。年始早々に行われた第6回のOsaka Graduate Conference in Japanese Studiesでは、日本各地から大阪大学の中之島センターで集まった大学院生と活発な議論ができました。2021年度から代表を務めた拠点形成プロジェクト「在日コリアン文学の国際研究ネットワーク構築」が3月に終了しましたが、その後も海外メンバーと面会を重ね、共同研究や出版物に関する相談を続けています。また、7月に宇野田副拠点長と一緒にハイデルベルク大学の東アジア研究センターを訪問し、機関間の協力について協議した結果、協定を締結する運びとなりました。教育の面では、既存の大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」に加え、今年開始した人文社会科学系オナー大学院プログラム「グローバル日本学ユニット」にも授業を提供し始めており、学生のさらなる成長を期待しております。

野尻英一（グローバル人材育成部門／人間科学研究科教授）

私は哲学が専門ですが人間科学研究科では「比較文明学研究室」を担当しており、グローバルな視点から日本の文化・文明を考究する研究を行っております。「和解」の問題に取り組む国際先導研究科研費プロジェクトや国際和解学会の活動にも参加しており、記憶と共感によるナショナリスティックなアイデンティティの形成メカニズムとその克服について研究しております。G30英語コースの授業では、さまざまな国からの留学生たちと歴史認識や国民的アイデンティティの問題を議論することで、知的にエキサイティングな経験をさせていただいております。特に今年は夏目漱石の文明論に興味を持って研究する学生が現れて、良かったと思います。今後もグローバル日本学の教育研究の推進にあたり「日本」とは何か、考え続けながら携わってまいりたいと思います。

年間活動記録

2024年1月～2024年12月

2024年　1月	第6回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies開催 GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム「京都学派およびポスト京都学派と科学哲学・技術哲学の現在」開催
2024年　2月	GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム「これからの「戦後」への教育学」開催
2024年　3月	GJS Research Workshop「大学院生研究発表会 Selected Graduate Explorations of Global Japanese Studies 」開催 「No Border Fest in Minoh」開催（協力）
2024年　4月	GJS Research Workshop「Green with Milk and Sugar: When Japan Filled America's Tea Cups　海を越えたジャパン・ティー：緑茶の日米交易史と茶商人たち」開催 2024年度グローバル日本学教育研究拠点「拠点形成プロジェクト」募集開始 大阪大学附属図書館と本拠点デジタル日本学部門との協働で、懐徳堂文庫専用の検索ウェブサイトの公開 2024年度10月開始人文社会科学系オナー大学院プログラム「グローバル日本学ユニット」履修生募集
2024年　5月	GJS Research Workshop「ラテンアメリカにおける「帝国日本」の再考：ブラジル・アマゾンにおける移植民事業の展開から」開催
2024年　7月	GJS Research Workshop「Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Japan's East Asian Empire」開催 GJS Research Workshop「明治百年祭の表象の分析と課題――過去15年の調査から」開催
2024年　8月	GJS-ERI拠点形成プロジェクトワークショップ「キリシタン新出資料・トゥールーズ断簡――日葡辞書稿本とキリシタン版国字本を中心に」開催 国際シンポジウム「SHARED AUTHORITY――歴史を描くのは誰か」開催
2024年　9月	第7回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studiesの研究発表募集開始（2025年1月開催） ブリティッシュコロンビア大学アジア学科と学術交流協定を締結
2024年 10月	ハイデルベルク大学哲学部 東アジア学センター（日本研究所）と学術交流協定を締結 GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承――アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアローグ」開催
2024年 11月	第9回 大阪大学豊中地区研究交流会にてポスター発表 2025年度4月開始人文社会科学系オナー大学院プログラム「グローバル日本学ユニット」履修生募集
2024年 12月	GJS Research Workshop「Perspectives on Japanese Studies from Latin America」開催

［参加報告］第9回大阪大学豊中地区研究交流会

日本研究の国際的ネットワーク構築とグローバル日本学教育研究拠点

ファクンド・ガラシーノ（大阪大学グローバル日本学教育研究拠点特任講師）

2024年11月22日（金）、大阪大学豊中キャンパスにて、第9回大阪大学豊中地区研究交流会「知の共創」が開催されました。豊中キャンパスに本拠を置く人文社会科学系や理系の教員と大学院生などが互いの研究や取り組みを知り、交流を深めることを目的として、ポスター発表会と情報交流会が行われました。この交流会にはさらに近隣の自治体や企業関係者による発表と参加があり、市民の方々も多く来られ、文理や学内外の垣根を越えた議論と情報交換の貴重な場となりました。本拠点は、これまでと同じように、大学院人文学研究科との合同で発表者として参加しました。

そこで、副拠点長である宇野田尚哉教授とガラシーノは、世界における日本研究の状況を概観しつつ、本拠点による国際的ネットワーク構築の現状と今後の展望について説明しました。まず、本拠点が日本研究の博士後期課程を擁する北米、西欧、オーストラリアや東南アジアの拠点的な教育研究機関と緊密なネットワークを構築している現状について述べました。その際、本拠点では年に1度の国際シンポジウムや月1回のワークショップを開催し、国際的共同研究を公募・支援し、さらには国際的発信能力を高めるための教育プログラムを実施しており、グローバルなハブとしてのプレゼンスを発揮しつつあると主張しました。そのうえで、メキシコとブラジルを軸にした南米の教育研究機関や研究者との連携をめぐる今後の展望について言及しました。中南米では修士課程までしか日本研究のプログラムがないことも多いですが、南米地域の大学等や研究者と積極的にネットワークを作ることによって、本拠点のグローバルな展開を新たな方向へ発展させ多様化させる可能性があると考えています。

豊中地区研究交流会に参加することで、国際的な教育プログラムと研究を担っている多くの方々と議論できたことは、とりわけ貴重な成果でした。互いの活動に多くの共通点があるにもかかわらず、普段から接触する機会が少ない方々との情報交換を通して、国際的教育と研究をめぐる大阪大学全体の状況と課題に対する理解を深めると同時に、今後の連携と協力のためのブレーンストーミングを行いました。本拠点に期待される役割を果たすべく、このような学内交流の重要性に改めて気づかされる会でした。

構成員一覧

拠点長

田中敏宏 TANAKA Toshihiro	理事・副学長

グローバル拠点形成部門

宇野田 尚哉 UNODA Shoya	副拠点長 グローバル拠点形成部門長・運営委員 人文学研究科 教授
小野博司 ONO Hiroshi	運営委員 高等司法研究科 教授
鳩澤 歩 BANZAWA Ayumu	運営委員 経済学研究科 教授
渡邊英理 WATANABE Eri	運営委員 人文学研究科 教授
南 和志 MINAMI Kazushi	運営委員 国際公共政策研究科 准教授
ランブレクト・ニコラス LAMBRECHT, Nicholas	運営委員 人文学研究科 准教授
宮原 暁 MIYAHARA Gyo	人文学研究科 教授
三好恵真子 MIYOSHI Emako	人間科学研究科 教授
山崎吾郎 YAMAZAKI Goro	COデザインセンター 教授
近藤和敬 KONDO Kazunori	人間科学研究科 准教授
安岡健一 YASUOKA Kenichi	人文学研究科 准教授
ガラシーノ・ファクンド GARASINO, Facundo	グローバル日本学教育研究拠点 特任講師

デジタル日本学部門

宇野田 尚哉 UNODA Shoya	副拠点長・デジタル日本学部門長 運営委員 人文学研究科 教授
田畑智司 TABATA Tomoji	人文学研究科 教授
吉賀夏子 YOSHIGA Natsuko	人文学研究科 准教授

グローバル人材育成部門

岩井茂樹 IWAI Shigeki	副拠点長 グローバル人材育成部門長・運営委員 日本語日本文化教育センター 教授
野尻英一 NOJIRI Eiichi	運営委員 人間科学研究科 教授
岡部美香 OKABE Mika	人間科学研究科 教授
櫻井千穂 SAKURAI Chiho	人文学研究科 准教授
永原順子 NAGAHARA Junko	人文学研究科 准教授
松村薫子 MATSUMURA Kaoruko	日本語日本文化教育センター 准教授
松岡里奈 MATSUOKA Rina	日本語日本文化教育センター 特任講師

ネットワーク形成管理部門

岩井茂樹 IWAI Shigeki	副拠点長 ネットワーク形成管理部門長・運営委員 日本語日本文化教育センター 教授
山本 ベバリー・アン YAMAMOTO Beverley Anne	運営委員 理事・副学長
岸本恵実 KISHIMOTO Emi	人文学研究科 教授
筒井佐代 TSUTSUI Sayo	人文学研究科 教授
バーデルスキー マシュー BURDELSKI, Matthew	人文学研究科 教授
藤平愛美 FUJIHIRA Manami	日本語日本文化教育センター 准教授
松浦幸祐 MATSUURA Kosuke	日本語日本文化教育センター 助教

編集後記

2024年の年次報告書をお届けいたします。本拠点の活動の広がりを知っていただくために、今年度も、拠点形成プロジェクト、国際シンポジウム、月例ワークショップ、大学院生発表会などの報告を掲載することができました。特に、国際シンポジウムは、近年注目を浴びているオーラルヒストリーの分野で活発な議論が行われました。このような取り組みは、本拠点が目指す「グローバル日本学」の形成をさらに加速させていくものと期待しているところです。

（岩井）

2024年4月からグローバル日本学教育研究拠点に着任することになり大変嬉しく思っております。今年は、月例ワークショップや国際シンポジウムの開催、さらに国際学会への参加を通して、東アジア、北米、中南米や中東の研究者や機関との連携にとりわけ力を注ぎました。その際、刺激的な議論を交わしつつ、今後の協同のためのアイディアも生まれ、本拠点としてこれまでになかった多様な地域との連携に手応えを感じることの多い一年でした。この年次報告書をご覧いただく方々には、本拠点のこのような国際的活動の広がりを読み取っていただければ幸いです。

（ガラシーノ）

大阪大学グローバル日本学教育研究拠点のロゴについて

様々な「知」が集まり新たなものが生まれ発展していく様子を、複数の羽を持った鳥の姿で表現したデザイン。「襲（かさね）の色目」を取り入れ、多様性を表現している。

発行者＝大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
https://www.gjs.osaka-u.ac.jp

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 日本学棟101
TEL 06-6850-6394
gjs@ml.office.osaka-u.ac.jp

発行日＝2025年3月31日

Osaka University
Global Japanese Studies
Education and Research Incubator